

第27回FDフォーラム 報告集

シンポジウム1

大学教育の「場」を問い直す -ポストコロナに向けて

シンポジスト

- | | |
|----------|----------------------------|
| 相川 真佐夫 氏 | 京都外国語大学・京都外国語短期大学 教務部長 |
| 西野 毅朗 氏 | 京都橘大学 教育開発・学習支援室／経営学部 専任講師 |
| 大橋 慎太郎 氏 | 新潟大学 農学部 准教授 |

コーディネーター

- | | |
|--------|-----------------------|
| 畑田 彩 氏 | 京都外国語大学・京都外国語短期大学 准教授 |
|--------|-----------------------|

- | | | |
|------|--|----------|
| P1～ | コーディネーターによる総括 | 畑田 彩 氏 |
| P16～ | 趣旨説明 | 畑田 彩 氏 |
| P22～ | 講演1. 「ハイフレックス授業の可能性－教室内から教室外へ」 | 相川 真佐夫 氏 |
| P38～ | 講演2. 「遠隔授業で教育・学習の場はいかに変化したか」 | 西野 毅朗 氏 |
| P55～ | 講演3. 「地域とともに創る『学びの場』
－新潟大学ダブルホーム制度について」 | 大橋 慎太郎 氏 |

大学教育の「場」を問い直すーポストコロナに向けて

コーディネーター

畑田 彩(京都外国語大学・京都外国語短期大学 准教授)

1. 背景と目的

COVID-19 の感染拡大以前から、大学教育の場は多様化してきた。従来型のオンキャンパスでの授業にとどまらず、フィールドワークや野外実習、ボランティアなど、キャンパスを離れたさまざまな場も教育の「場」として機能してきた。図らずも COVID-19 は、その多様化に拍車をかけた。オンキャンパスの授業は対面から遠隔・ハイフレックスへと移行し、学生はどこからでも授業が受けられるようになった。オフキャンパスの活動は、感染防止のためのガイドラインが作られ、少人数分散開催、感染者減少期を見極めての実施、VR の活用などの対策が講じられた。「大学のキャンパスに来て、その道の専門家である教員による対面授業を受ける」という、大学教育では当たり前であったことが、当たり前ではなくなった。大学教育の「場」の多様化が益々進行している今、大学教育の在り方の再考が求められているのではないかと。そこで、本シンポジウムの目的を『多様化する大学教育の「場」を概観し、ポストコロナの大学教育の在り方を再考する』こととした。

2. ご講演の内容

本シンポジウムでは 3 人の登壇者から話題提供をしていただいた。

相川真佐夫先生(京都外国語大学・京都外国語短期大学)からは、教務部長というアドミニストレータの立場から、2020 年度から 2 年間の授業形態の場をどのように構築し、どのように機能させていったかをご紹介いただいた。ハイフレックス型授業など 2 年間で得た技能や設備をポストコロナでも活かすべく、海外との交流プロジェクトやタンデムラーニング、海外の日本語学習者への支援などの事例を紹介し、教育の場が「教室内から教室外にも繋がる」ことを提示した。

西野毅朗先生(京都橘大学)からは、同期型・非同期型の遠隔授業の事例をご紹介いただき、遠隔授業について行われた全国の教員・学生を対象としたアンケートやインタビュー調査の結果に基づいて、遠隔授業の利点と欠点を整理していただいた。そこから、教員も学生もほぼ同意見を持っていることが明らかになった。また、遠隔授業そのものを全面的に肯定あるいは否定するのではなく、遠隔授業のどの要素に利点や欠点があるのかに注目し、より良い授業を実現するために有効活用することが重要であると示された。

大橋慎太郎先生(新潟大学)からは、オフキャンパス活動である「ダブルホーム」の事例についてご紹介いただき、コロナ禍での活動の継続の方法と課題についてご紹介いただいた。コロナ禍では、ビデオ会議システムを使ってイベントに参加したが、対面活動ができなくなったことにより、信頼関係構築の鈍化や帰属意識の低下、当事者意識の低下がみられ、今後の課題であるとされた。

最後に、シンポジウムに参加してくださった約 270 名のみなさんならびに運営スタッフのみなさんに、この場を借りてお礼申し上げる。

3. 質疑応答

登壇者に対してたくさんの質問が寄せられた。時間内で対応できた質問も含め、すべての質問に対する回答を以下にまとめたので、ご確認いただきたい。

質疑応答のまとめ

<相川先生>

Q1. 対面配慮学生で基礎疾患を理由にした学生に対して、診断書などの提出を義務付けられたのでしょうか。ご教示をお願いいたします。リモート参加の事前承認の「事前」のタイミング、期限はどれくらい前になっていたのでしょうか。対面配慮学生の申請・受付方法と許可は誰がどう出していたのか(各教員が個々に判断でしょうか)、詳細を教えてくださいたいです。

A1. 基礎疾患に関する診断書などの提出は不要としました。その確認は事務的にも難しいという判断でした。授業設計のために、学期が始まる直前までに(一旦)申請するように伝えましたが、実際は、学期の最後まで申請は受け付けます。濫用が想定されますが、その日の気分次第で遠隔になったり大学に出てきたりすることを許可するものではない、というスタンスを示し、数々の必須同意事項を設けることで濫用を防ぐしかないと考えました。申請は Google Form から行います。許可制ではなく届出制です。Google Form から、授業担当者へ随時スプレッドシートで自動的に情報が共有されます。

Q2. 教員間での激論があったとのことですが、本学でも似たような状況があり、特に非常勤の先生方との協同において工夫されたことなどありましたら、是非ご教示いただければと思います。

A2. なかなか良い工夫はなく、ケースバイケースで対応するしかなかったです。ひとつの授業科目下で複数の授業が開講されているものについては、異なる授業形態は取れない、という理由を説明し、ご理解をいただきました。

Q3. Teams も 2022 年度の新入生には再度使い方のガイダンス等を行う必要があると考えますが、そのための資料などの準備状況はどうでしょうか。

A3. 新生には、入学時に大学の ID とパスワードを渡します。その際に、次のように連絡しています。

<本学の遠隔授業を初めて受講する学生へ(新生、新編入生、復学生)>

- ・京都外大オンライン学修準備サイト <https://sites.google.com/kufs.ac.jp/startup-guide/> にアクセスして下さい。

- ・本学の遠隔授業には、Microsoft Teams (以下、Teams) が必要ですので、インストールして下さい。

- ・インストールには、大学から発行されている ID とパスワードが必要です。以下のサイトから、自身の PC、タブレット、スマートフォン等使用するデバイスに合わせて、デスクトップ版またはモバイル版をインストールして下さい。また、同時に、Word, Excel, Power Point 等の Microsoft

Office 系アプリケーションも無料でインストールすることができます。

<https://products.office.com/ja-jp/microsoft-teams/download-app>

- ・〇月〇日(▲)頃までに、Teams 上に履修している授業がすべて表示されます。出席する授業を押して、投稿欄等で教員の指示を確認して下さい。

- ・大学からの連絡は、@kufs.ac.jp のドメイン名のアドレスに届くようにしています。それ以外のアドレスには直接連絡しませんので、必ず、@kufs.ac.jp のアドレスを毎日確認して下さい。または、転送設定をお願いします。

Q4. ライブで講義されたそうですが、大人数の受講者では受信トラブルなどはなかったでしょうか？本学では電話による問い合わせが同時に来た経験があり、対応策や改善策について教えて頂けないでしょうか。宜しくお願い致します。

A4. Teams では大きな受信トラブルは生じませんでした。授業担当教員の自宅でのネット環境が悪く、なかなか授業が始まらないケースがありました。そういうときは、学生から教務に電話があり、教務が担当教員に電話で連絡を取りました。各授業 Team には教務部と IT サポートが登録されていますので、「まもなく授業が始まりますので少々お待ちください」というメッセージを履修学生にすぐに流すことができ、待機させました。何か起きたときのために、学生用には「緊急遠隔授業コールセンター」を設けています。

https://sites.google.com/kufs.ac.jp/startup-guide/home#h.p_qKY1ZqappfJx

Q5. 2020 年度は同期型双方向の場合、学生側の通信容量などの課題があったかと思います。授業形態として通信容量を下げるような取り組みや個別の配慮なども行われていたのでしょうか。また、学生はきちんと最後まで授業についてこれていましたでしょうか。

A5. 2020 年度、通信容量をできるだけ減らすため、先生は 100 分まるまる顔を出して授業をしないようにお願いしました。学生側にも、「カメラはなくてもかまわない」としました(2021 年度以降、カメラは必要としています)。動画につながるようなものはできる限り排除するというものです。非同期の動画オンデマンドも 2020 年度は避けました。

Q6. ハイフレックスツールを全教室に配備されたとのことですが、どのようなツールでしょうか。

A6. こちらのサイトを一度ご覧下さい。

<https://sites.google.com/kufs.ac.jp/startup-guide4teachers/home/in-person>

Q7. ハイフレックス授業の場合、学期末の定期試験の形態はどのように対応されたのでしょうか。

A7. 大きな課題です。本学は、学期の最後に包括的に評価する方法ではなく、平常試験により評価する方法を採り、2020 年度、2021 年度については、定期試験を実施しておりません。いずれにしても、公平性は担保されず、悩みの種です。

Q8. 教室内から教室外へつながる という点ですが、いまはコロナ禍のためそのような工夫をされていますが、それを実際の「外」につなげていくということも踏まえているということでしょうか？

A8. 海外との交流授業、タンデムラーニングについては繋がりを強化したいです。コロナ前からやっていたことですが、それが、特定の先生だけがやっていたものを多くの先生に拡大できると信じたいです。

Q9. 示された学生アンケートには「留学生の交流」に十分な満足がない回答もあったかと思えます。Teams が、学生の正課外活動でも活用されていると紹介されましたが、正課授業以外で、本来自然的に行われてきた正課外での学生間交流に対して、大学として支援をされていることがあれば、教えてください。

A9. 留学生との交流は 2020 年度、ほぼできませんでした。いつもなら、留学生が大学にたくさんいて、NINJA(いわゆる Learning commons)での企画で交流が行われるのですが、2020 年度は日本人学生も大学にあまりきていませんでした。秋学期はオンラインでも行った例はありますが、そんなに活発にはできませんでした。外国語大学ということで、それを期待して入学した学生に対しては失望となる点で、そこを克服できなかったのは大きな反省点です。

正課外活動での大学支援について、今すぐ思いつくものはないですが、学生はクラブ・サークルが大学にて対面で行えなかったのも、それぞれ Microsoft Teams で独自に teams を作成しオンラインで交流していたようです。学生の方がクリエイティブに何かしなければと思っていたのだと察します。例えば、こういうものがあります。

<https://www.kufs.ac.jp/about/projects/pikaichi.html>

<https://www.kufs.ac.jp/news/detail.html?id=Y3cr4Pp2>

Q10. COIL のようなオンラインでの協働学習授業はポストコロナ禍においても継続されるご予定でしょうか？

A10. 海外の大学との繋がりは、先生のコネクションに頼っているところがあります。その先生が自分の授業に取り組んでやっていることなので、その先生のエネルギーと時間が続く限り続くと思いますし、学生も海外との合流を望んでいると思います。

<西野先生>

Q11. Zoom から Teams へとの変化は、料金の関係でしょうか？

A11. 料金の問題もありますが、授業ツールが複数あることによって学生が混乱するという問題を予防したいという意図もあります。2020 年度は Teams の通信負荷が大きく、Zoom の方がスムーズだという声もあり、1 年間併用しておりましたが、Teams の機能が改善され（ブレイクアウトルームなども実装され）Teams に集約しても問題ないだろうという判断になりました。

Q12. 授業システムですが、teams や LMS に集約された理由について詳しく教えて頂けないでしょうか。

A12. 複数の方法があることによって、学生が混乱してしまうことを防ぐためです。授業アンケートの自由記述の中でも、各教員があまりにもバラバラなツールを使っていると混乱するという声が複数あがっておりました。できるだけ混乱を予防するという意図から、集約できるものは集約していこうという方針になりました。

Q13. スライド 7 ページでツールの乱立状態から 2 つに集約されたとのことですが、この達成率は実際にはどの程度だったのでしょうか。2020 年度のオンライン授業で慣れてしまったツール（例えば Zoom など）を 2021 年度にも継続するという教員もいたのではないかと予想されます。

A13. 実際の実施率については定かではありませんが、たしかに継続して Zoom 等を利用した教員もいたと考えられます。一方で、シラバスを登録する際に、授業のプラットフォームとして大学の LMS を用いるか、Teams を用いるかを選択するようになっていきますので、ある程度は方針を反映させられたとも考えています。

Q14. 学習支援 LA は学生さんを配置しているとのことですが、科目担当などはあるのでしょうか？また実際にどのような質問が来るのでしょうか？

A14. 科目担当はありません。ラーニングコモンズの専用デスクにシフト制で誰かが常駐するようになり、適宜相談にのっています。相談内容は、レポートの書き方を中心としたライティングに関わる相談がほとんどです。今後は、学習支援を学生に活用させたいとお考えの先生と連携し、科目とタイアップした形での学習支援も推進していく予定です。

Q15. 中間授業アンケートの学生の回答率はどれくらいでしょうか。また学期末にもアンケートをとられている場合、その回答率はどれくらいでしょうか。

中間、学期末、ともに、どの時期にアンケートを実施されていますか。アンケート回答を促す工夫などあれば教えてください。

A15. 2021 年前期の中間授業アンケートの回答率は約 60%、同期末アンケートは約 50%でした。回答を促す工夫としては、当該時期に教室等でアンケート回答を促すチラシを貼ったり、教員からも回答を促していただけるよう教卓に「お願い」文を貼ったりすることがあります。また、回答された結果に対して、教員から学生に対してフィードバックをしていただくなどして、回答した意味があったと学生に感じてもらえるようにすることです。さらには、項目数をできるだけ減らし、回答負担を低減させることも重要と思います。

Q16. 中間アンケートを実施された結果、先生方の授業改善が促進したとの見解を持たれている点、非常に興味深いのですが、実際に学期末アンケートと比べて学生の意見で異なる点などありましたか？また何回目の授業時点で実施しましたか？現在も実施されているのでしょうか？

A16. 中間と期末の記述欄の違いを分析しておらず、自由記述の設問そのものの形式も異なるため一概には言えませんが、中間で上がっていた改善要望が、期末では上がりにくくなる傾向はあります。なお中間アンケートは全 14 回の講義中 7 回目のあたり、期末アンケートは 11 回目あたり以降から回答できるようになっています。中間アンケートの回答期間は 1 週間程度、期末アンケートの回答期間は 1 か月程度となっております。期末アンケートは常に行っていますが、中間アンケートは 2020 年前期、2021 年前期に行いました。2022 年度から通年で行ってもらえるよう担当部局に提案予定です。

Q17. 本学でもコロナ前から中間授業アンケートを実施してきたのですが、実施してもその後の授業にすぐに対応できない等の理由で、今年度をもってやめようという総括になったのですが、貴学で中間アンケートが意味あるものになっている仕掛けがあったのでしょうか。真逆な対応になっていることを知りましたのでお聞きしてみました。

A17. 本学の中間アンケートは学生の回答ベ切後、できるだけ早く教員が結果をみられるようにしています。従いまして、すぐに対応できないということはありません。一方で、前期のみ実施して後期は実施しなかった理由として、後期は対面授業が増えるため必要がないのではないかという意見や学生が評価疲れをおこしてしまう危険性が高まるというものがあります。一方で中間アンケートの授業改善への有用性は証明されましたので、上述の通り、2022 年度は通年で実施してもらえるよう提案してまいります。

Q18. 私の本務校は東京なのですが、関東と関西でコロナ対応が随分異なり、学生の印象も違うかと想像しています。ご紹介いただいた各アンケートですが、対象はどのような範囲（京都近郊？関西？全国？）だったのでしょうか。差し支えない程度で教えてもらえると幸いです。

A18. アンケートは全て全国対象です。インターネット調査ですので割付も行い、全国的な学生分布と大差ない地域別回答数になるように調整しております。ご指摘の通り、都市部限定とそうで

ないところで比較すれば、地域差も見えて面白いかもしれませんが、今回の調査はあくまで全国的な傾向ということでご理解いただければ幸いです。

Q19. 特に中間アンケートの実施により、授業アンケート結果が改善された点につきまして、より具体的にお話をお伺いできますと幸いです。また、中間・期末アンケートそれぞれの回答率を上げるため、どのような対策を講じていらっしゃるかについてもお聞かせいただきたいです。

A19. 例えば、期末のアンケートでは、教育状況および自身の学習態度、総合的な受講満足度等で8項目を設定していますが、すべての項目で平均点が向上しました。自分自身の担当科目では、中間アンケートで「課題の提出期限を伸ばしてほしい」「席替えが多いと嬉しい」「授業資料を授業前に出して欲しい」といった要望があがったため、提出期限を1日伸ばし、席替えを1回しかやらない予定だったところを3回に増やし、授業資料もできるだけ早めに学生に提示して予習しやすいようにしました。アンケートの回答率を上げる工夫については、A15をご参照ください。

Q20. 遠隔授業での学修力という点で、授業外の学習時間はコロナによってどのような変化があったのでしょうか？もし、事例やご存知のことがあれば、教えてください。

A20. 授業外学修時間は伸びていると考えられます。ただし、これも質問の仕方次第なところがあります。例えば授業外学習時間を「授業課題に取り組む時間を含む」としているか「授業課題に取り組む時間は含まない、自主的な学習」としているかによっても数字は異なってきます。後者に限定すれば、もしかすると課題ばかりで時間が取られてしまって、自分が好きな学びをする時間は減ってしまっているかもしれません。これについては詳細な調査や分析が今後必要と考えます。

Q21. 少人数のゼミであってもオンラインで顔を出したがる学生が多いのですが、どのようなことが障害なのかについて教えていただけますと幸いです。強制はできませんが、顔を出すことでコミュニケーションの合目的化が防げるのか、ご教示いただきたく存じます。

A21. 顔を出さないことの理由の第1に、カメラがない、壊れている、うまく機能しないことが挙げられます。第2に、自分の顔を見ながら授業を受けるのは気持ちが悪いという方もおられます。第3に、プライベート空間が移りこんでしまうのが嫌だという方がいます。第4に、他の学生が出していないのだから自分だけ出すのは嫌だという方もいます。第5に、単純に自分の顔をアップで見られるのが恥ずかしいという方がいます。なお、カメラをオンにしてもコミュニケーションの合目的化は（多少その影響を減じることとは思いますが）防げません。ただ、カメラをオンにしておいた方がコミュニケーションが取りやすくなるのは事実ですので、コミュニケーションが重要となる科目ではカメラをオンにすることを推奨することは望ましいと思います。強制はできませんが、「原則オンにすること。オンにできない場合は教員に理由を伝えて了承をもらうこと」などとしても良いでしょう。またグループワークをする際にも、最初の自己紹介などのタイミン

グで、カメラをオンにできない理由を伝えてもらうようにすると、コミュニケーショントラブルを予防することができます。

Q22. オンデマンド授業による復習のしやすさ（スライド p.9）をより多くの学生が（一部の意欲的な学生だけでなく）活用するようになるための仕掛けは何かありますか。

A22. 小テストや中間・期末テスト（レポートも）などの積極的な活用が大事だと思います。自分がどれだけ理解できているかを、自分自身が自覚するということや、復習すれば成績が伸びるということを学生自身に体感してもらうと学習意欲は高まります。同じテストで満点をとれるまで何回も挑戦できるというような仕組みを取り入れている先生もおられます。こちらの先生の分析ですと、初回の授業で、そのような取り組みをした学生は最終的な成績も良いとのことでした。そういう意味では、第1回の授業（オリエンテーション）で、この授業でどのように学べば、より良く学べるかを伝えたり、中間テスト等の転換点で正答に関するフィードバックだけではなく、学び方に関するフィードバックも与えたりできると理想的だと思います。

Q23. まとめで出ておりました、自主学習能力について醸成させる取り組み事例などあればご教示ください。

A23. 京都橘大学ではリフレクション・デイという振り返りと目標設定を行う機会を半期に1回設けています。その中で、自分の学び方の良い点や課題点を踏まえこれからの学習のあり方について考えてもらうようにすることで、自主学習力を高めてもらおうと試んでいます。また、新学部においては1年次の教養科目として「クリティカルシンキング」を必修化しており、その中で自分自身が抱える問題解決を試みてもらっています。その中には、自身の学生生活そのものを改善しようとするテーマが数多く挙げられ、経験学習を通じて自らの生活を改善する力を高めています。

Q24. スライド 18 枚目で、「学生の課題に対する意識」について紹介いただき大変参考になりました。一方で、課題を出す側である「教員の課題に対する意識」はどうなのかが気になりました。たとえば「遠隔授業になったことで対面授業時と出題する内容に変化があったのか」といったことです。課題の出題に関して、西野先生が意識されていることや実践されていることがありましたら、教えていただけますとありがたいです。

A24. おっしゃる通り、教員側の課題に対する意識については今後の研究テーマの1つになると思います。私自身は、いままでリフレクションペーパー（感想を尋ねる）程度だった課題に加え、成果物を提出させたり、授業内容を授業外で実践した結果を問うたりといった、より学修成果に関わる課題も出すようになりました。重めの課題を出すことに対する躊躇がなくなったといえますか、学生も課題が出ることに対する拒否反応がコロナ以前より減ったためと思います。

Q25. ゼミをハイフレックスで運営されるうえでの課題をもし整理されておられましたら、ご教示いただけますと幸いです。今年度、ハイフレックスでゼミを行いました、対面授業とオンラインでの参加者が半分ずつおり、異なる環境下にある学生間でどのように「ゼミでの一体感」をつくれればいいか、試行錯誤しておりました。

A25. 対面授業で参加する学生と、そうでない学生の間で温度差が生まれる危険性があります。対面授業で参加する学生同士は関係性が構築できますが、そうでない学生は関係が構築しにくく孤立してしまう危険性があります。ゼミでの一体感を作ろうと思うと、全員対面、あるいは全員遠隔といった条件の同一性も必要ではないでしょうか。ある大学では、対面で集まっている学生たちも遠隔授業にアクセスして、全員 PC 上で授業を受ける形にして、遠隔参加者と対面参加者の条件を同一にしている事例もありました。

もちろん 4 年次の卒業論文指導など、就職活動と重なってなかなか全員が集まらないということはコロナ以前からもあったと思いますので、ある程度関係性ができている状態の学生たち、あるいはどうしても遠隔でしか参加できない学生がいる場合はハイフレックスが効果を発揮すると思います。

<大橋先生>

Q26. 地域での活動に参加する場合、大学での専門的な科学的知見をどのように活かすのか。ご教示頂けると助かります。

A26. 私の担当しているホーム（グループ）を例にお答えすると、活動の中心となっているお米作りにおいて、農学部の学生には各作業（除草、水管理、中干など）の意味や効果などを他分野の学生へ教示し、計画、実行、改善につながることを期待しています。また、農業生産の場に生きる生物の生態について自然環境から見た意見など、生物を専門とする理学部学生からの知見共有などもあります。また、同地域では世界各国からの観光客が集まる「美人林」というブナ林があります。こちらを紹介するための複数言語でのパンフレット作成を活動に取り入れ、外国語を専門とする学生を中心に進めております。このような形で各自の専門を活かしております。

Q27. ダブルホームの取り組みに参加する学生は何パーセントくらいでしょうか。

積極的な学生は、どんなことにも意識が高く放っておいても自分から学び活動し失敗しても回復力があるし、このような体験を通して増々成長していくのですが、どんなことにも消極的で、大学が提供するあらゆる活動に参加しない学生をどう巻き込んでいくかがいつも悩みです。意欲的な学生を増々成長させることに軸足を置いておられるのか、そうでない学生を巻き込む仕掛けをお持ちか、教えてください。

A27. 現在、在籍学生約 10,000 人のところ、460 名の参加学生がおります。4.6%ほどになります。現在年度始めに説明会、各ホームからの活動紹介を行うイベントを行っております。しかし、消極的な学生を巻き込めているかまでは追跡調査できておりません。現状としては、意欲的な学生の成長を促進させることが主となっている現状かと思います。しかし、この活動をより推進するために消極的な学生だけではなく、大学内の教職員も一層巻き込む仕掛けが必要であると感じております。

Q28. 経験や技術・知識の応用を学ぶホームとして地域活動を捉えた際に、もう一つのホームである学部での活動についても何か変化が生じるのでしょうか？また、学部のカリキュラムにおいても、地域活動を意識して何か工夫をされているのでしょうか？

私見としては、地域での活動を体験した学生は、より学部での専門分野の学びに対して主体的・自主的に向き合うようになるのではないかと考えております。

Q29. ありがとうございます。ダブルホームに参加された学生さんたちは、その後の学ぶ姿勢に変化はありましたでしょうか？

A28, 29. 主観となりますが、すべての学生に感じるというわけではありませんがダブルホームの活動をしている学生に、自ら「考える」力と、積極性、責任感を感じます。4年生における研究活動において、研究計画から実験デザインを自主的に行う姿勢を感じた例がございます。

学部のカリキュラムにおける地域活動を意識した工夫などについて、全学部を把握しているわけ

ではありませんが、学部のカリキュラム側からダブルホームを意識した工夫等は聞いておりません。

Q30. 学生、教職員、地域の方の多くが満足されている素晴らしい取り組みだと思いますが、約2割の不満足の方の理由がわかれば教えてください。それが解決できれば完璧ですね。

A30. アンケート結果の中で、コロナ前の2019年度では「満足している」との回答が95%でした。そのことを考えると、感染症拡大の中、活動を制限したことに対する不満が影響しているのかと考えられます。ただ、年度ごとに少しずつメンバーが入れ代わる学生と、変わらない地域住民の間に意識のズレが生じる例などもあり、満足していないとの意見につながったことも考えられます。

Q31. 卒業や修了を第一の目標にする学生らは、このような素晴らしい企画であっても、プラスアルファ的なものに二の足を踏む傾向がある印象をもちます。その上で多くの学生が参加して素晴らしいと感じましたが、これは単位認定と紐づいているのでしょうか。もし、そうではないなら、学生が積極的に参加するようなインセンティブなどの工夫を教えてください。また、まだまだ行動制限が続きそうな社会情勢のなか、ダブルホーム運営に対する新しい施策などがあれば、教えてください。

A31. 課外活動であるホーム運営、地域活動、各種イベント企画における学びを深めるために授業科目（個性化科目：ダブルホーム入門Ⅰ・Ⅱ、リーダーシップ演習等）を開講しています。また、全学分野横断創生プログラムがあり、主専攻（メジャー）とは異なる専門分野を学び、分野や専門領域を超え自分の興味・関心や問題意識に沿ったマイナー（副専攻）学修支援科目を開設しております。これらは卒業認定単位にも含まれます。

新しい施策ではありませんが、学生のモチベーション維持を期待し、行動制限の中でもできる活動を提案できるよう、外部講師を招いたワークショップを開催するなど勉強会を行っております。

Q32. 素朴な疑問ですが、地域の拠点の皆さんとのコミュニケーションツールはPC等を用いられているのでしょうか。日頃あまり利用されていないPC等のツールを現場の方が活用するには様々なハードルが考えられますが、この点の対応やサポートはどのように図られたのかご教示願います。

A32. 部門として通信機器や通信環境の提供などのサポートは行っております。機器利用に関する説明書を作成し対応いただきましたが、それ以上のサポートはできていないのが現状です。初回に関して担当教職員が現地を訪問し、初期設定または利用方法など説明を行うなど対応しました。

Q33. 京都の祇園祭に学生と参加していましたが、コロナで参加不能となりました。一旦途切れ

た地域との信頼関係を、どのように回復していけばよろしいでしょうか。悩んでおります。

A33. 的確な回答はできませんが、第三者として間に入れる方を通して、再び連絡を取り合うといったことを試みた例があります。例えば、我々「部門」が地域住民と学生の間に入るといったことや、地域の役場の方に入っていただくなどもありました。

年度ごとに少しずつメンバーが入れ代わる学生と、変わらない地域住民の間に意識のズレが生じる例などもあり、信頼関係の維持に苦労した例などもあります。

Q34. まさに、いかに律することができるか。その通りですね。

ただし、善意に頼って環境問題は解決できないのと同じく、大部分の学生においては、性善説では、無理ではないでしょうか。

平均的な学生は、指定されて、学んでみて、初めて面白いと思うのではないかと。

その場合、やり方が問題かなと思います。

A34. 学生が「面白いと思う」までのプロセスについて、ご意見の通り、強制やルールの中で「経験する」ことで興味のなかったことに対して興味がわくというパターンが多いのではないかと思います。興味のない学生に「経験させる」アイデアを教員側は常に考えていかなくてもいいのだと改めて感じました。

ダブルホームでは、オフキャンパスの中で、教員だけではなく、他学部、職員、地域住民、地域環境などから多くの「刺激」に触れる機会を得ることができる活動だと思っています。今後この活動をより良いものにするために、「やり方」を試行錯誤していきたいと思っています。ご意見ありがとうございました。

<登壇者すべて>

Q35. この2年間でさまざまなオンライン授業の取り組みを行ってこられたと思いますが、これらの経験を踏まえて、今後、どのように教育・学習の「場」を提供していこうと考えていますでしょうか。私見でもかまいませんので、ご意見いただければ、と思います。

A35. (相川)

この2年間、緊急事態の必然として行ってきた遠隔での授業方法が、ハード面もある程度まで整い、教える方の技術や学生側の学び方というソフト面も、標準的なものとして実行可能であることが証明されました。私見ですが、これをコロナ禍前に完全に戻すのはもったいないと考えています。とくに、パスポートや航空券を持たなくても、教室という限られた空間を飛び越えて海外に繋がることで、外国語大学の「教育の場」として特色を持ったものを提供していきたいと考えています。

A35. (西野) この2年間の経験を踏まえ、使えるツールの幅が広がり、スキルも向上しました。やってやれないことはないという、変な自信もつきました。例えば、要配慮の学生に対しても、ハイフレックス型の授業の実施等の選択肢を広げ、今まで以上に質の高いもの、学生に合った学び方を提供できると思います。また、演習や実習においても、グループウェアを有効活用し、授業時間内外でのコミュニケーションの活発化や、関係者の巻き込みなどをより円滑に実現できるはずです。よりよい授業や教育の在り方を模索し続けるという姿勢はコロナ前と変わらず、その実現のためにテクノロジーを有効活用していくことを意識しながら教育・学習の「場」を提供していきたいです。

A35. (大橋) この2年間の試行錯誤の中で、対面型とオンライン授業やオンデマンドなどのメリット、デメリットについてそれぞれ感じてきました。今後感染症が収まったとしても、有効なツールは使いこなしていきたいと考えおります。ビデオ会議システムでは、「距離」、「時間」といった制限を開放できるメリットがありました。このメリットを活かした利用を考えていきたいと思います（出張せずに講演、講義を受ける。現地、現場からリアルタイムでの情報提供、情報共有など）。

Q35. このシンポジウムでは、大学教育の「場」が多様化しており、大学教育の在り方の再考に焦点が当たっていると思いますが、そもそも「大学教育のアイデンティティ」について、皆様はどうお考えでしょうか？

A36. (相川) 大学は、学んだことを社会に繋げるタイミングにおいて、プロフェッショナリズムとアカデミズムの両方のアプローチからそれぞれの大学が「建学の精神」に基づいて、どういう人材を育てたいのかを定義し、基礎となるエッセンスを具現化する場所と考えています。それが「大学教育のアイデンティティ」であります。大学によって、プロフェッショナリズム色が強い

ところ、アカデミズム色が強いところがありますが、それは大学の特徴として捉えれば良いものと考えます。それは「各大学のアイデンティティ」だと考えます。

本学の例を出してみると、京都外国語大学では「言語を通して世界の平和を」を建学の精神に、「異文化理解のプロ」を目指す場所と考えています。様々な背景を持った人たちの中に飛び込み、異文化による摩擦を進んで解決しようとする志を持った人材を輩出するために、何を必要としているかをカリキュラムの中に投入し、卒業時にはその力を持った学生を世の中に出していきたいものです。このヴィジョンは、「教育の場」がいくら多様化し、どこにあっても、ぶれるべきではないと信じております。

A36. (西野) 大学(教育)とは一体何かということは、教育基本法や学校教育法にも明記されていることですので、一般論はそちらにお譲りするとして、「大学教育の在り方の再考」という点から私見をのべさせていただきたいと思います。コロナ禍で痛感したことの1つは、当たり前は当たり前ではないということではないでしょうか。予測不可能な社会を乗り越えられる教育の必要性は以前から訴えられていたわけですが、まさにコロナがその重要性和現実性を我々につきつけたと思います。1つにはテクノロジーの発展と活用がこの危機を乗り越える手段となりましたが、一方でテクノロジーだけでは乗り越えられない部分もあることが明らかになりました。大学教育は社会の変化という荒波を乗り越え、むしろその波を作り出していけるような人物を育成するために、諸問題の解決のためのテクノロジー活用力ならびにテクノロジーだけでは解決できない問題に対処する力を養うことが必要ではないかと考えます。

A36. (大橋) 私の所属する農学部で学ぶ農学では、ピュアサイエンスだけではなく学際的な考え、また実学なども重要になります。体系化された学びだけではなく、知識の応用、発想力、創造力、着想力を育むことが重要だと考えております。その中で、これらの力を育むために必要な「経験」の場を如何に提供できるかということを考えております。大学教育のアイデンティティとして、イノベーション能力を養えるところである、ということを個人的には意識しております。

Q37. 全員の先生方にお聞きしたいのですが、大学教育の「場」が多様化する状況においては、さまざまな「場」での支援も重要になってくると思います。具体的には、たとえば家の中で落ち着いて動画が見られない学生に対し、どうフォローしていけるか。といった「問い」があります。これは大学だけでなく小中高大すべてを貫く課題と言えますが、「場」の多様化とともに、教員だけ、大学だけでは十分フォローできない「場」をどう考えていくべきか。やや本シンポジウムの範囲を超えた質問になっているかもしれませんが、お考えをお聞かせ願えれば幸いです。先ほど書き込まれたご質問に似た質問なので、かぶっているお答えになる場合は割愛ください。

A37 (相川)

「教員だけ、大学だけでは十分フォローできない「場」をどう考えていくべきか」について、どう方策を立てるのかについては、他の2名のシンポジストが充分回答されていると考えますので、アドミニストレータの立場から回答します。

多様化にはケースバイケースで可能な限りの解決策を持って対応するべきだと思いますが、基本路線というか初期設定はしっかりと立てておく必要があるでしょう。最初から、多様性を前提にガイドラインやプランを立てると、基軸が歪んでしまいます。多様化への対応もケースが増えることによって、その方策も一般化するでしょう。ちなみに、どんな多様化を受け入れたとしても、学修成果の到達点はぶれないようにするべきでしょう。

A37（西野）多様な「場」を支援するためには、多様な「可能性」を検討する必要があるということだと思います。おっしゃる通り、自宅では動画が見られない学生については、大学で見られるような環境を提供する必要があるでしょう。大学で見られる環境といっても、大部屋では安心して同期型のオンライン授業に参加できないという学生もいますから、個室あるいはそれに近いような環境を提供していくことも考える必要もあります。遠方に住んでいるため、大学までも出てこられないという学生がいる場合、たとえば企業や自治体と連携して最近設置が進んでいる主要駅のリモートワークスペースやコワーキングスペースの活用や、大学間連携によるキャンパスの共有などもありえるかもしれません。こうした連携による支援策も今後考えられると思います。またそういったことを実現していくために、予算措置や規制緩和が必要であるということであれば地域や国に支援してもらうことも考えるべきだと思います。

A37（大橋）.大学では支援できない物理的なサポートについては、地域や国などからの支援が必要だと強く感じています。また、コロナによってパラダイムシフトしている教育現場の現状があり、その変化に対し、対象者（教育を受ける側だけではなく、教育を提供する側も含めて）の共通認識が重要だと考えております。この共通認識をもって初めて具体的な対策、支援が明確になるのではないかと感じております。少し質問の意図からはずれるかもしれませんが、必要なポイントなのではないかと思い、コメントさせていただきました。

大学教育の「場」を問い直す ーポストコロナに向けてー

コーディネーター

畑田 彩

(京都外国語大学外国語学部)

➤ はじめに

大学教育の「場」は多様化

キャンパスでの授業(従来型)

ー講義・演習・実習・実技・実験・ゼミなど

オフキャンパスでの授業

ーフィールドワーク・野外実習・ボランティア

留学・高大産学連携

大学コンソーシアムの単位互換など

そのような中で起こったCOVID-19の感染拡大



COVID-19は大学教育の「場」にも影響

キャンパスでの授業(従来型)

一講義・演習・実習・実技・実験・ゼミなど

→対面での授業が困難に

オフキャンパスでの授業

一フィールドワーク・実習・ボランティア

留学・高大産学連携

大学コンソーシアムの単位互換など

→感染拡大防止のため中止・延期・形式変更

一方で、COVID-19は新しい教育方法を考える契機に

① キャンパスでの授業

講義

- 同期型やオンデマンドでの遠隔授業
- 対面と遠隔を組み合わせたハイフレックス授業

演習・ゼミ

- 遠隔では、カメラ、マイクの利用で双方向性を担保

実験・実技・実習

- 遠隔でもできる方法を模索

実施例)

学生各自が魚を買ってきて魚の解剖
トレーニングを配信し、ワークシートで自己評価

対面と遠隔のハイフレックスの現在—ポストコロナはどうか？

対面で授業を希望する学生と、諸事情により対面授業が受けられない学生が同時に授業を受けられるシステム

利点 大学に来られない学生にも受講の機会が与えられる
対面と遠隔の学生間でのやり取りもできる

問題点 ソフト面、ハード面でのサポートが必要
遠隔受講を認めるガイドライン制定とその運用

2年間の経験・設備で、ポストコロナはどんな教育の「場」を産むか

外国語学部： 航空券の要らない「海外」との繋がりを

国際貢献学部： デジタルリテラシーを礎に拡張・仮想観光体験を

→ 相川真佐夫先生のご講演

遠隔授業

遠隔授業ならではの利点

どこでも授業ができる・授業を受けられる

大人数対象の講義でも、個別のやり取りが可能で
双方性の授業ができる

問題点

学生の反応がわかりにくい

遠隔ですべての授業ができるわけではない

→西野毅朗先生のご講演

一方で、COVID-19は新しい教育方法を考える契機に

②オフキャンパスでの活動

人数を減らして分散開催

感染対策を講じ、感染者減少期に実施

遠隔でできることにシフト

VRの活用

オフキャンパスプログラム

大学によって活動内容・活動形式は多様
大学で学んだことを実践に移す活動

COVID-19の影響を最も受けた授業形態

制限が多い中、どのように活動を継続するか？

遠隔でできる活動はあるのか？

→大橋慎太郎先生のご講演

COVID-19で得た教育の方法論は
ポストコロナでも活用できる！

遠隔授業・ハイフレックス授業

単位互換の授業が受けやすくなる

災害時など不測の事態でも実施可能

障がいを持つ学生への「合理的配慮」の
一つになりうる

オフキャンパスプログラム

対面と組み合わせることで、継続的な活動
が可能になる

多様化する大学教育の「場」を概観し、 ポストコロナの大学教育の在り方を再考する

<タイムスケジュール>

9:50-10:20	ハイフレックス授業の可能性－教室内から教室外へ (京都外国語大学・京都外国語短期大学教務部長 相川真佐夫氏)
10:20-10:25	小休憩 (Q&Aで質問をお寄せください)
10:25-10:55	遠隔授業で教育・学習の場はいかに変化したか (京都橘大学 教育開発・学習支援室／経営学部 専任講師 西野 毅朗氏)
10:55-11:00	小休憩 (Q&Aで質問をお寄せください)
11:00-11:30	地域とともに創る「学びの場」－新潟大学ダブルホーム制度について (新潟大学農学部 准教授 大橋慎太郎氏)
11:30-11:35	小休憩 (Q&Aで質問をお寄せください)
11:25-12:00	質疑応答

シンポジウム終了後、交流会を行います

時間: 12:00-12:30

開催様式: Zoomミーティング
(URLはのちほどお知らせします)

ブレイクアウトルームで、相川先生、西野先生、大橋先生、畑田の4つの部屋に分かれます。各ルーム間を自由に移動していただくことができます。質疑応答時間に取り上げられなかった質問へのご回答や所属大学の事例共有を参加者同士でできればと考えています。

Feb. 19, 2022
第27回FDフォーラム シンポジウム
9:50-10:20

大学教育の「場」を問い直すーポストコロナに向けてー

ハイフレックス授業の可能性 ー教室内から教室外へー

京都外国語大学・京都外国語短期大学
教務部長 相川真佐夫

自己紹介 相川真佐夫

経歴

1967年和歌山県生まれ。1991年和歌山大学教育学部卒業。1993年University of Northern Iowa修士課程修了。2008年神戸大学総合人間科学研究科博士課程修了。博士（学術）。専門は異言語教育政策、英語教育。2004年より京都外国語短期大学専任講師として着任。現在、京都外国語大学外国語学部英米語学科教授。2019年より京都外国語大学・大学院・京都外国語短期大学の教務部長を務める。

主な活動、著書

『世界の外国語教育政策・日本の外国語教育の再構築にむけて』（共編著・東信堂）、『国際的にみた外国語教員の養成』（東信堂）、『英語到達度指標CEFR-Jガイドブック：Can-Doリスト作成・活用』（大修館書店）、『世界の言語政策 第3集 - 多言語社会を生きる』（くろしお出版）など共同執筆。2003～2005年『外国語のカリキュラムの改善に関する研究ー諸外国の動向ー教科等の構成と開発に関する調査研究』2005～2007年『諸外国の教育課程に関する研究』国立教育政策研究所より研究委託（共同）。大学英語教育学会、日本「アジア英語」学会理事。

- ・教務部長（教員としては授業 6 コマ担当）
- ・教務部は、大学 2 学部、短期大学、大学院、留学生別科を管理
- ・シンポジウムの話の立場は、アドミニストレータ > 研究者・教員
- ・外国語大学に所属する専任教員・非常勤講師の出身は様々
異文化交流・異文化理解の宝庫、異文化摩擦の体験的学びの場
この 2 年で得たものは、多文化共生力とレジリエンス

Contents

1. 京都外国語大学・京都外国語短期大学（以下、京都外大）
2年間の授業形態と教育の「場」
2. 京都外大のハイフレックス
3. ポストコロナは？
この2年間で得たものを活かして
どう大学教育の「場」を問い直すべきか

1. 京都外大 2年間の授業形態と教育の「場」		
Stage 2	Stage 1	Stage 3
	2020年度 前期：未経験事態に暗中模索 後期：異文化摩擦に悩んだ末の苦肉の策	2021年度 ハイフレックスをレベルアップ 非同期型は不可避のため導入
授業形態と「場」	前期：遠隔授業（約2,000コマ） 後期：対面1割+遠隔授業9割 密・接触・人流を考慮し、 教室は1日1回使用原則	対面授業が基本 「対面配慮学生」は遠隔で授業参加が可能 緊急時には全て遠隔授業に切り替え
授業方法	「時間割通りに」 前期：同期型遠隔が基本 後期：同期型遠隔が基本（9割） 対面+同期ハイフレックス（1割）	<同期型>「時間割通りに」 通常時：対面+遠隔ハイフレックス 緊急時：全て遠隔授業に切り替え <非同期型>「時間割通りに」Teamsにupload オンデマンド動画（100名超の授業） 一方向生配信録画も可
授業システム	Microsoft Teams manaba (LMS & Portfolio)	Microsoft Teams manaba (LMS & Portfolio)
教育開発支援	教員用・学生用ガイドライン (JP/EN) 教員研修会 (JP/EN別々に実施) 教員情報交換Teams (JP/EN) 施設管財課のICTサポート、LINEコールセンター	教員用・学生用ガイドライン (JP/EN) 新任教員研修会 (JP/EN同時に実施) 教員情報交換Teams (JP/EN) 情報システム課（新設）によるICTサポート増員

本表の作成には後続する西野先生の発表スライドを参照しました。

1. 京都外大2年間の授業形態と教育の「場」 2020年度前期：同期型遠隔

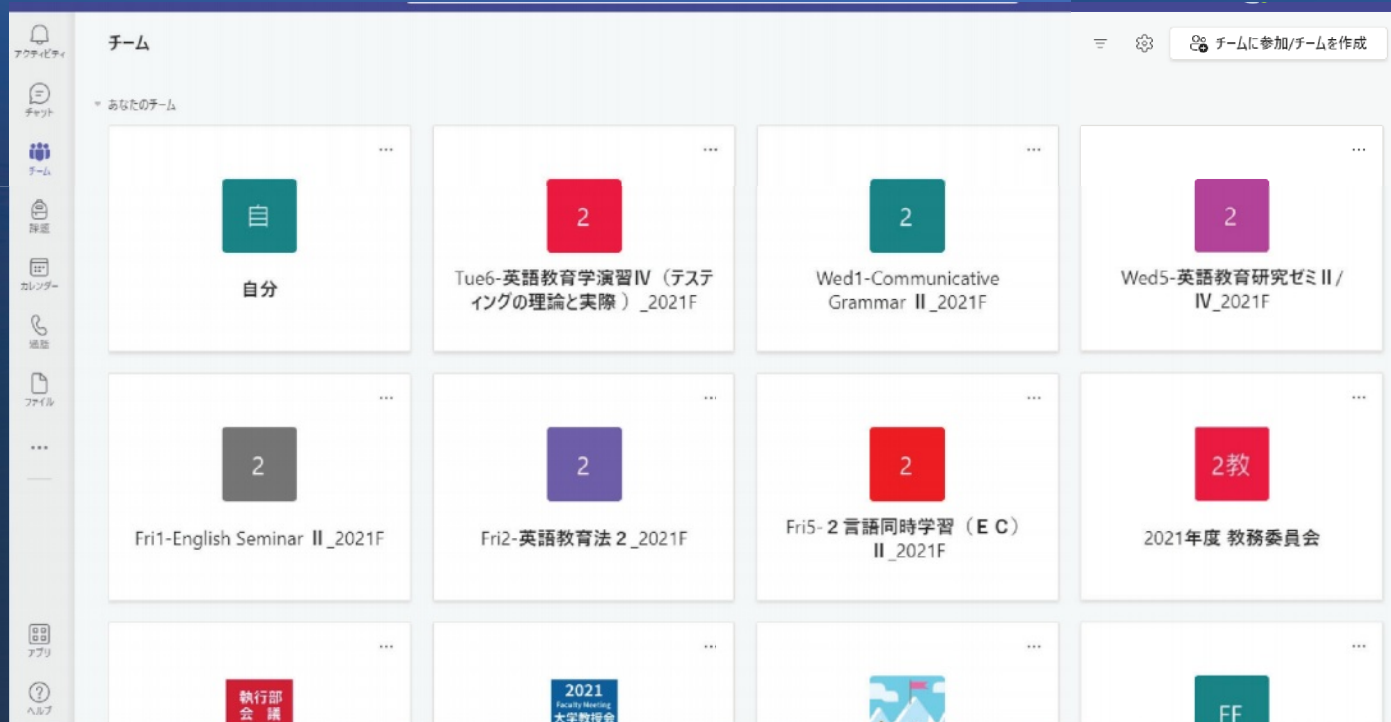
Stage 1

< 検討ポイント >

- ・語学授業、特に、音声コミュニケーション系は同期型双方向リアルタイムが必須
- ・学修習慣を乱さぬよう、「時間割通り」実施（大人数授業はライブ）
- ・Teamsは構造が複雑だが、遠隔授業ツールを一元化する必要性を優先
- ・入国できない留学生に配慮（中国はGoogle不可）

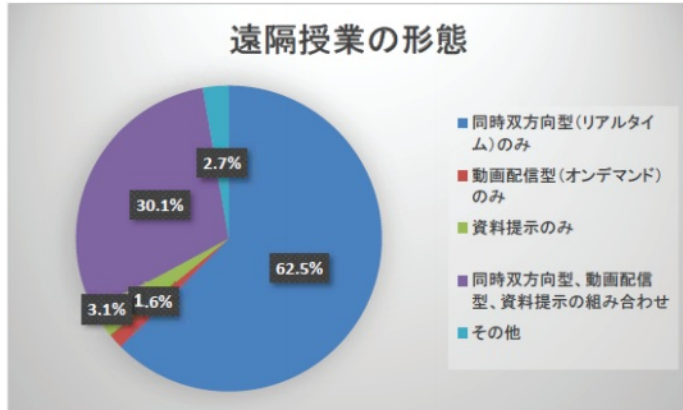
2020年度		部門別 科目数と受講者数の内訳					
学期	人数	科目数					
		外国語学部	国際貢献学部	短期大学	大学院	別科	合計
春学期	1～100名	1287	301	103	88	152	1931
	101～200名	32	10	1	0	0	43
	201～300名	14	0	0	0	0	14
	301～400名	1	0	0	0	0	1
	401名以上	3	0	0	0	0	3
	合計	1337	311	104	88	152	1992
秋学期	1～100名	1290	298	77	67	123	1855
	101～200名	36	7	0	0	0	43
	201～300名	11	0	0	0	0	11
	301～400名	3	0	0	0	0	3
	401名以上	0	0	0	0	0	0
	合計	1340	305	77	67	123	1912

Teamsでの同期型遠隔が授業の「場」



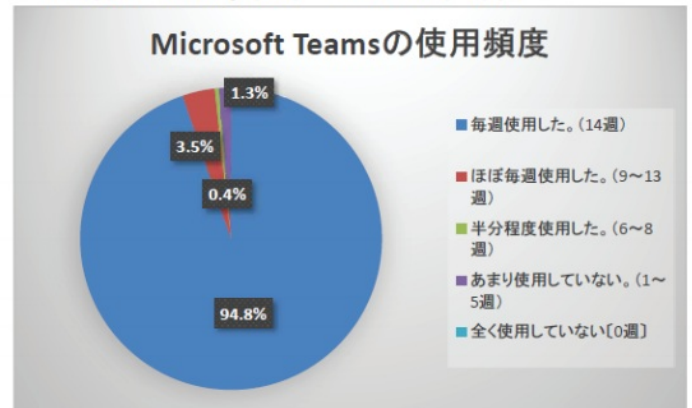
◎春学期の遠隔授業は、どの形態でしたでしょうか。(複数選択可)

- ・同時双方向型(リアルタイム)のみ……………[160 (62.5%)]
- ・動画配信型(オンデマンド)のみ……………[4 (1.6%)]
- ・資料提示のみ……………[8 (3.1%)]
- ・同時双方向型、動画配信型、資料提示の組み合わせ…[77 (30.1%)]
- ・その他……………[7 (2.7%)]



◎Microsoft Teams は使用しましたか。担当授業全体の平均として回答ください。

- ・毎週使用した。(14週) ……………[219 (94.8%)]
- ・ほぼ毎週使用した。(9～13週) ……[8 (3.5%)]
- ・半分程度使用した。(6～8週) ……[1 (0.4%)]
- ・あまり使用していない。(1～5週) …[3 (1.3%)]
- ・全く使用していない。(0週) ……[0 (0%)]



1. 京都外大 2年間の授業形態と教育の「場」 2020年後期：一部対面に戻す策

Stage 2

<検討ポイント>

- ・少人数設計ゆえに大教室が少ない
- ・同科目名の複数クラスで授業形態は統一すべき(例：Academic Writing 22クラス)
- ・「密」「接触」「人流」は、音声コミュニケーション系の授業では避けにくい
- ・対面回帰の増量に対する教員の反対意見
- ・接触感染対策のため教室は1日1回使用原則
- ・ハイフレックスツールをほぼ全て教室に配備

収容人数別	教室数一覧
49名以下	41
50～99名	50
100～199名	9
200～300名	2
300名以上	2
合計	104

春に続きTeamsでの同期型遠隔授業が基本の「場」
1割程度の授業の「場」はハイフレックス

2020 年度 京都外国語大学 在学生調査

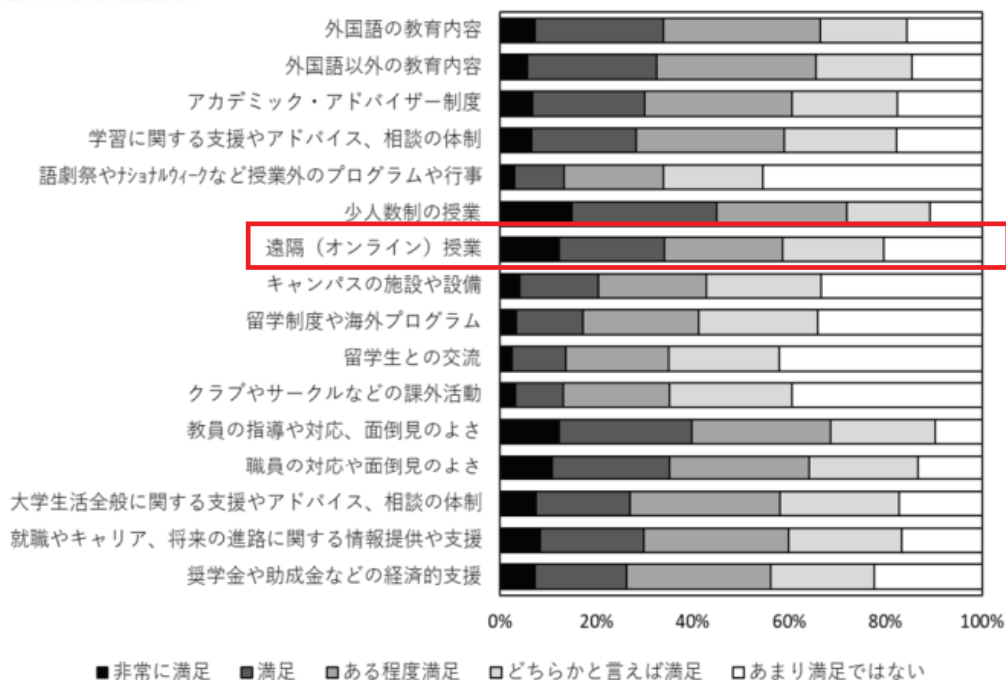


図 1 この 1 年間における学生満足度

1. 京都外大 2 年間の授業形態と教育の「場」 2021年度：対面＋遠隔参加（対面配慮）

< 考慮ポイント >

Stage 3

- ・ 対面授業を基本にする必要性（社会情勢）
- ・ 大人数の授業を非同期型にする必要性
- ・ 非同期型は動画（資料のみは回避）「時間割通り」にこだわり、uploadを時間割通りに
- ・ 教室の収容が50%になるよう配置
- ・ 教室に来られない学生は「対面配慮」の申請
- ・ 「対面配慮」をガイドライン化（教員学生両方）
- ・ 全教室ハイフレックスをversion up
- ・ 緊急時には全て遠隔授業に切り替え可能に
- ・ 2020年秋がパイロットとなり、ハイフレックスの全面実施（対面配慮をしない授業もあり）

「対面配慮学生」

- 基礎疾患や既往症のために新型コロナウイルスの感染に対して高いリスクがある。
- 出入国管理規制により日本に入国できない。
- 通学や対面授業の中で新型コロナウイルスに感染する危険性について、精神的に強い不安を抱えている。
- その他、通常の状態では生じないが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って生じた理由によって、対面での授業出席が難しい。

対面授業が9割「場」はハイフレックス
非同期型は基本的にどこでも「場」は可能

対面授業に伴う配慮希望届 Request notifications for not attending face-to-face (f2f) lessons in the fall semester 2021.

・授業は原則的に対面授業で行われます。ただし、以下(a)～(d)いずれかの理由により、対面授業を受講できない場合は、「対面配慮学生」として可能な範囲で配慮します。配慮を届け出る学生は、2021年9月15日(水)～22日(水)に、本フォームで申請して下さい。

・学生からの届出は教務部が集約し、各授業担当者に伝えます。配慮の方法については、各授業担当者により異なりますので、授業担当者からの指示に従って下さい。なお、本配慮届は、2021年度秋学期だけに適用します。(春学期に申請した人も再度申請が必要です。)

・科目等履修生制度を利用している学生は、科目等履修生の学籍番号でも申請を行って下さい。

Those who would like to receive consideration for not attending face-to-face (f2f) lessons in the fall semester 2021 are required to complete this form from Wednesday, September 15 to Thursday 22, 2021.

Notifications from students are collected by the Division of Educational Affairs (kyomu-bu) and forwarded to each course teacher. Each teacher will consider the method students will use to take the course. This method may differ depending on the teachers in charge of each course, so please follow their instructions. Remember that this notification of consideration will be applied only to the fall semester of 2021. (Students who applied in the spring semester also need to apply again.) "Kamoku-to rishusei" students should apply using another UW ID number for the corresponding courses.

In order to submit the form, you are required to agree to the following (1) to (9).

配慮を希望する理由 The reason of your request for not being able to attend classes f2f

配慮を希望する理由としてあてはまる項目にチェックを入れて、送信して下さい。 Please check the reason of your request for not being able to attend classes f2f. *

- ☐ (a) 基礎疾患や既往症のために新型コロナウイルスの感染に対して高いリスクがある。 I have a high risk of infection with COVID-19 due to underlying or pre-existing illness.
- ☒ (b) 出入国管理規制により日本に入国できない。 I cannot enter Japan due to immigration restrictions.
- ☐ (c) 通学や対面授業の中で新型コロナウイルスに感染する危険性について、精神的に強い不安を抱えている。 I have a strong mental anxiety about the risk of being infected with COVID-19 while commuting to school or in f2f classes.
- ☐ (d) その他、通常の状況では生じないが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って生じた理由によって、対面での授業出席が難しい。 Although it does not occur under normal circumstances, it is difficult for me to attend classes f2f due to the reasons caused by the spread of COVID-19 infection.

同意の確認 Confirmation of consent *

- (1) 2021 年度秋学期に、対面授業を受講できない事由について、虚偽無く、熟考した上で配慮申請の届出をします。学期の途中で配慮事由が解消された場合は、教務部にメールまたは電話で連絡し、対面配慮申請を取り下げます。【教務部連絡先】 E-mail: kyomu@kufs.ac.jp TEL: 075-322-6032 In the fall semester of 2021, I will submit a consideration application after carefully considering the reasons why I cannot take f2f classes. If the reason for consideration is resolved in the middle of the semester, I will contact the Division of Educational Affairs by email or phone and the application for not attending f2f classes will be withdrawn. [the Division of Educational Affairs] E-mail: kyomu@kufs.ac.jp TEL: 075-322-6032
- ✓ (2) 特定の曜日、講時、授業担当者へのみの配慮を求めることができないことに同意します。また、配慮申請をしているにもかかわらず、その日の都合や気分により対面授業に参加することはしません。（対面での出席人数の変更が、授業計画や教室のセッティングに影響を及ぼします。） I agree that it is NOT permissible to request non-attendance of f2f classes during a specific period and/or day of the week, or with regards to a certain instructor. In addition, I agree that I will not attend classes f2f or remotely depending on the mood of the day (changes in f2f attendance affect lesson plans and classroom settings).

(3) 対面配慮ができない授業科目があることを理解し、次のURL で確認しました。
https://www.kufs.ac.jp/cms_image/file/2021fall_1.pdf（更新される可能性があります。常にチェックして下さい。）そのうえで、次の①～④に同意します。 I

- ☐ understand that there are some courses that are off limits as they necessitate f2f participation only, and I have confirmed them at the following URL https://www.kufs.ac.jp/cms_image/file/2021fall_1.pdf. (Always check as it may be updated.) I also agree to the following (i) to (iv).

- ☐ (3)-① 対面配慮ができない授業科目を履修登録しません。 (i) I will not register for courses that necessitate f2f participation only.

(3)-② 履修登録期間終了後から履修取消期間までに対面配慮の申請を行う場合で、対面配慮ができない授業科目を登録していた場合は、取消期間中に取り消します。 (ii) If I apply for not attending f2f sometime between the end of the course registration and the course cancellation period, I will withdraw from courses that necessitate f2f participation only during the cancellation period, if any.

- ☐ (3)-③ 履修取消期間終了後に「対面配慮」を申請し、かつ対面配慮ができない授業科目の取り消しを希望する場合は、対面配慮の申請時に教務部に相談します。取り消しなかった場合、配慮の期間や成績評価に不可欠なテストの未受験、課題の未提出等により不合格になる場合があることを理解します。 (iii) If I apply for not attending f2f after the course cancellation period and wish to cancel the courses that necessitate f2f participation only, I will consult with the Division of Educational Affairs when applying for not attending f2f. I understand that if I do not cancel, I may fail the courses depending on the duration of my absence from f2f classes, any tests I missed that are essential for grade evaluation, and any non-submission of assignments.

- ☐ (3)-④ 対面配慮の申請後は対面配慮ができない授業科目に出席しません。 (iv) After applying for not attending f2f, I will not attend classes that necessitate f2f participation only.

- (4) 授業への参加方法および出欠の確認方法については、各授業担当者の指示に従います。配慮方法には、Teams 等を使用してリアルタイムで授業に参加する方法を採る授業（同期型）と、授業を録画したものを視聴するオンデマンド方式を採る授業（非同期型）があり、各授業担当者により異なることを理解しています。それぞれの出欠の確認方法についても、各授業担当者により異なることを理解しています。I will follow the instructions of each class instructor regarding how to participate in the class and how to confirm attendance. I understand that there are two methods of taking classes: participating in real time (synchronous type) via MS Teams and using an on-demand method to watch recorded lessons (asynchronous type). I understand that the method of class and attendance check differs depending on the teachers.
- (5) 月50GB の通信量を確保するか、固定回線のインターネット接続環境を整備します。この整備に関わる費用については、大学からの補助がないことを理解いたします。I agree that I have to secure 50GB of communication data per month or prepare a fixed-line Internet connection environment. I understand that there will be no subsidy for communication costs in 2021.
- (6) 同期型の授業に参加する際、カメラやマイクを必ず用意します。授業担当者がカメラやマイクのオンを求めた際は、その指示に従います。I agree that I will prepare a camera and microphone when attending a synchronous class. When the teacher asks me to turn on the camera or microphone, I will follow their instructions.
- (7) 授業担当者から電子媒体で送られた資料をプリントアウトするよう指示された場合は、その指示に従います。プリントアウトに費用がかかる場合は、自費で行います。If the teacher tells me to prepare a hard-copy of the materials which were sent, I will prepare them. If the printout costs money, I will do it at my own expense.

- (8) 同期型の配慮方法を採る授業において、体調不良等で出席できない場合は、授業担当者に欠席する旨とその理由を伝え、授業担当者の指示に従います。If I am unable to attend a class that uses a synchronous method due to poor physical condition, etc., I will inform the teacher that I will be absent and communicate clearly the reason for my absence. I will then try to recover my physical condition while following the instructions of the teacher.
- (9) 課外活動（クラブ・サークル等）への対面での参加はできないことに同意します。I agree that f2f participation in extracurricular activities (clubs, circles, etc.) is not permissible if I request not to attend classes f2f.
- ❗ 配慮届を提出（送信）するには全てに同意していただく必要があります。In order to submit the form, you are required to agree to the following (1) to (9).

次へ

フォームをクリア

このフォームは 京都外国語大学 内部で作成されました。不正行為の報告

Google フォーム

1. 京都外大2年間の授業形態と教育の「場」2021年度：対面＋遠隔参加（対面配慮）

Stage 3

<考慮ポイント>

- ・対面授業を基本にする必要性（社会情勢）
- ・大人数の授業を非同期型にする必要性
- ・非同期型は動画（資料のみは回避）「時間割通り」にこだわり、uploadを時間割通りに
- ・教室の収容が50%になるよう配置
- ・教室に来られない学生は「対面配慮」の申請
- ・「対面配慮」をガイドライン化（教員学生両方）
- ・全教室ハイフレックスをversion up
- ・緊急時には全て遠隔授業に切り替え可能に
- ・2020年秋がパイロットとなり、ハイフレックスの全面実施（対面配慮をしない授業もあり）

「対面配慮学生」

- 基礎疾患や既往症のために新型コロナウイルスの感染に対して高いリスクがある。
- 出入国管理規制により日本に入国できない。
- 通学や対面授業の中で新型コロナウイルスに感染する危険性について、精神的に強い不安を抱えている。
- その他、通常の状況では生じないが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って生じた理由によって、対面での授業出席が難しい。

対面授業が9割「場」はハイフレックス
非同期型は基本的にどこでも「場」は可能



2021.5.13更新

こちらのサイトでは、実施中の緊急遠隔授業に関する注意点や、manabaやMicrosoft Teamsなどの使用するツールについて、教員向けの情報を発信しています。ご質問などは、サイトの一番下にある問い合わせフォームからお送りください。

[遠隔授業について](#)

[遠隔授業に必要な機材と環境](#)

[遠隔授業に使用するツールと注意点](#)



こちらのサイトを参考に、遠隔授業で必要
行ってください。
※このサイトでは、スマートフォン（主にiPhone）

遠隔授業に必要なツール・アプリ



2. 京都外大のハイレックス



3. ポストコロナは？

- 2020年度 全面遠隔で教員・学生にTeamsでの同期型遠隔授業
- 2021年度 全教室にハイフレックスの設備が揃う
ほぼ全ての教員がハイフレックスに対応
- 2022年度 春学期は2021年度の形態を継続だが...



ポストコロナで教育の「場」はどうするべきか？

この2年間で得られたものを緊急時のものだけに留めるのは
“もったいない” “mottainai”

3. ポストコロナは？ 2年間で得られたもの

<ソフト面>

- 学生・教職員の活動に遠隔会議ツールが身近になった。学生のクラブ・サークル活動にもTeamsが増えている。
- Teamsの操作能力（学生・教員・職員）（Teamsは「会議」以外にも、LSMやLINEの機能も含む。Zoomへも操作が繋がる。）
- コロナ禍で、ハイフレックスが「特殊なもの」から「標準的なもの」に変化し始めている
- Teamsにより、教室内外を繋げる授業技術力・意識が向上？（教員）
- 海外との繋がりに航空券が不要となった（コロナ前はSkype程度）。世界中の教育機関がインターネットに繋がるようになった。
- **志を持った優秀な教員が、それぞれにできることを開発・改革**

<ハード面>

- 大学の全教室がハイフレックス可能に整備

3. ポストコロナは？ これからの「場」は教室内から教室外へ繋がるものを

外国語学部の教育の場の広がり

Type 1: Tandem Learning 言語交換学習

Type 2: 交流授業（COIL: Collaborative Online International Learning）

Type 3: 日本語の初級学習者への学習支援、日本語指導

(1) 「TLJ（Talk and Learn Japanese）」

(2) 日本語教壇実習

Type 4: 融合型（言語交換、交流授業、講義など）

Type 1: Tandem Learning 言語交換学習

英米語学科: 英語専攻生（京都外大）と先方の大学の日本語学習学生

- The University of the Philippines（Jehan Cruz先生）
- Ateneo de Manila University（Jehan Cruz先生Rob McClung先生）
- University of Technology, Sydney（Jehan Cruz先生Rob McClung先生）
- Macquarie University (MUQ), Sydney（Jehan Cruz先生）
- Douglas College, Canada（Rachelle Meilleur先生）

Type 2: 交流授業（COIL: Collaborative Online International Learning）

- 1年生の「総合ロシア語II」＋2年生の「総合ロシア語IV」の一環
- モスクワ市立大学の日本語学科（1・2年）との協働授業を展開
- 各大学の1・2年生から合同チームをロシア側と日本側で6組（露4人＋日6人/組）
- 日本学生には京都市の紹介ビデオ、ロシア学生にはモスクワ市の名所紹介ビデオを学習言語で作成
- 互いにロシア語・日本語を添削し合う
- 2度にわたるオンライン共同授業でビデオの内容等についてロシア語と日本語で質問し合う協働作業を実施
- 協働学習および合同授業のプラットフォームとしてKUFS側のTEAMSを使用
- 時差6時間（日本14時、モスクワ8時）
- ※もともと、京都の街に出かけてロシア人をつかまえてするはずだったのをオンラインで行えるように考えたとのこと。

Type 2: 交流授業（COIL: Collaborative Online International Learning）

- ・ハンガリーの2つの協定大学（カーロリガシュパール・カルビン派大学とELTE大学）の院生や先生方と交流授業（分析やディスカッション）
 - ・ポルトガルのポルト大学と交流授業（COIL）
 - ・メキシコのベラクルス大学と交流授業およびタンデムラーニング
 - ・クロアチアのザグレブ大学と交流授業およびタンデムラーニング
 - ・スペインのサラマンカ大学と交流授業（準備中）
 - ・フランスのボルドー大学とオンライン講座（準備中）
 - ・香港の香港中文大学と交流授業
 - ・台湾の東呉大学と交流授業
- 主導者：中西久美子先生（日本語学科）

Type 3: 日本語の初級学習者への学習支援、日本語指導

(1) 「TLJ（Talk and Learn Japanese）」 主導者：近藤由美子先生

タイの大学で日本語を学ぶ学生と1対1でバディを組み、週に1回1時間程度ビデオチャットで日本語授業の復習・会話練習を行う

・多様性、・日本語初級学習者と日本語でのコミュニケーションを通して、傾聴力・わかりやすく伝える力の向上に繋げる、自律性・情報を整理する力の向上に繋げる、外国語学習・教員採用試験対策へのモチベーションの向上

(2) 日本語教壇実習 主導者：大学＋日本語学科

通常であれば、韓国、台湾、マレーシアなどに行き、教壇に立って授業をするが、それをオンラインで行う。

3. ポストコロナは？ これからの「場」は教室内から教室外へ繋がるものを

国際貢献学部（Global Studies, Global Tourism）の教育の場の広がり

Type 1: 観光プロジェクト

地方の観光資源の掘り起こしを現地と協議

日本の観光プランとPR動画を制作し、台湾の学生と交換

Type 2: VR（仮想現実）のツアー企画

海外の学生にバーチャル京都ツアー

教育の「場」を仮想空間に繋げる

- ・教室をその教育に望ましい空間に置き換える
コックピット、電車の運転席 → 教育に応用
茶室、神社仏閣の中、機織りの場所、
東寺五重塔の上、清水寺の屋根、琵琶湖の水中

Eric Hawkinson 先生

<https://erichawkinson.com/>

教育の「場」は「時」も越えられる

平安時代 江戸時代 昭和時代

3. ポストコロナは？ これからの「場」は教室内から教室外へ繋がるものを

- ・2016年（平成28年）4月「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」施行
- ・教室の中に入ってこられない学生への「合理的配慮」支援方法としての「場」の可能性
- ・足の骨折をし入院している学生が病室からの授業参加
- ・空間を越えて「京都コンソーシアム」単位互換の授業
- ・台風、災害時などの事態でも瞬時に実施可能

3. ポストコロナは？ 教室外の教育の「場」に対するプランB

- 2年間のコロナ禍で教室内の授業は緊急対応できたが...
- フィールドワーク系が大打撃を受ける
- 京都外大の事例
 - a) コミュニティ・エンゲージメント・プログラム
国内外のフィールドに出かけ、貢献活動を行う
 - b) 企業の寄付講座（実地での見学を伴うもの）
 - c) 国内外のインターンシップ
- ポストコロナでは、「場」を切り替えられる”プランB”の必要性

3. ポストコロナは？

これからの「場」は教室内から教室外へ繋がる
ただし、持続可能なものとなるように

- 大学の教学アドミニストレータとして、人的資源、費用面でのバックアップ体制を取ることが重要
- 教員が個人のコネクションで授業方法を開発しているうちは順調に進むが、大学の取り組みとして体制を整えると、人が代われれば持続が難しくなる
- 教育の「場」のシフトも持続可能な取り組みになるように留意しないと、得たものを失ってしまう
- シンポジウム後の交流会でご助言いただければありがたいです。



ご清聴ありがとうございました。

東洋経済ACADEMIC 次代の教育・研究モデル特集 Vol.1

1月14日（金）発売の東洋経済ACADEMIC 次代の教育・研究モデル特集 Vol.1『未来社会を担うDX・AI
その真価を解き明かす』に4ページの本学記事を掲載。全国各地の大学、全16大学が掲載されていま
す。

DXとは、デジタルトランスフォーメーションの略で「進化したデジタル技術を活用・浸透させること
で、人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させていく」という概念。単なるデジタル化ではな
く、デジタルによってイノベーションを起こし、人々の生活をより豊かにすることを意味します。

今回は、外国語大学ならではのDXを紹介するため、外国語学部英米語学科教授相川真佐夫教務部長、
国際貢献学部グローバル観光学科藤本茂教授、本学総務部情報システム課担当課長へインタビューを実
施。本学独自の取り組みや今後の展望を掲載しています。



遠隔授業で 教育・学習の場はいかに変化したか

2022年2月19日

第27回FDフォーラム「シンポジウムⅠ」

京都橘大学 教育開発・学習支援室
経営学部 経営学科 専任講師
西野 毅朗

報告者プロフィール

- ・氏名：西野 毅朗（にしの たけろう／Nishino Takero）
- ・所属：京都橘大学 経営学部 ／ 教育開発・学習支援室 専任講師
- ・出身：兵庫県生まれ、愛知県育ち、京都府在住
- ・経歴：同志社大学政策学部卒、同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程修了、博士（教育文化学）
- ・専門：教育学、**高等教育論**、教育文化学、教育工学
- ・学外：日本**高等教育開発**協会理事 私立大学連盟研修委員 等
- ・連絡先：nishino-ta@tachibana-u.ac.jp



報告内容

1. 【教育】 京都橘大学の事例
2. 【教育】 他大学のICT活用教育事例
3. 【学習】 コロナ禍における学生の学び
4. 【学習】 遠隔ゼミナール教育の状況
5. まとめ

3

報告内容

1. 【教育】 京都橘大学の事例
2. 【教育】 他大学のICT活用教育事例
3. 【学習】 コロナ禍における学生の学び
4. 【学習】 遠隔ゼミナール教育の状況
5. まとめ

1. 京都橘大学の事例 —大学の概要



- 京都市山科区に1キャンパス
- 1967年橘女子大学（文学部）として開学
⇒2005年に京都橘大学に改称し、**共学化**⇒**拡大（総合化）路線**
⇒教育の質向上を目指して2016年に教育開発支援センター設置
2021年に教育開発・学習支援室に拡大改組
- 学生数約5300名、教員数約240名、専任職員数約120名
- **8学部15学科**
 - 文学部：日本語日本文学科、歴史学科、歴史遺産学科
 - 発達教育学部：児童教育学科
 - 国際英語学部：国際英語学科
 - 健康科学部：心理学科、救急救命学科、臨床検査学科、理学療法学科、作業療法学科
 - 看護学部：看護学科
 - 経済学部：経済学科
 - 経営学部：経営学科
 - 工学部：情報工学科、建築デザイン学科
- **2021年**に、経済・経営・工学部を改組新設／アカデミックリンクス竣工／ラーニング commons の拡充／**学習支援**およびキャリア教育に専門教員を配置／**BYOD**を推進

5

分散型ラーニング commons（現在11カ所）



学習支援LAと教職員



学生と保護者からの要望で
簡易的な個別ブースも設置



- ラーニング commons の利用者は多い状況（試験勉強＋**PC作業をする学生たち**）
- 個別ブースのニーズ有（同期型授業を大学で受ける／就職活動）
- オンラインの学習支援希望は未だ少ない状況（3/101名）
- LMSからの情報過多⇒学生が反応するのは対面授業で配られるチラシ

1. 京都橘大学の事例

—2年間の授業形態等の変化

	2020年度	2021年度
授業形態	前期は原則遠隔 後期は原則対面 ※対面9割 (80名ルールを適用)	原則対面(80名ルール)を維持しつつも、緊急事態宣言および教員からの要望に柔軟に対応 ※対面7~8割 ※ただし学年や学部によって差
授業方法	6類型 ※オンデマンド3種+同期型遠隔2種+対面	2類型 ※オンデマンド(原則動画) or 対面(+配慮ハイフレックス)
授業システム	ツールの乱立 (Teams、Zoom、LINE、LMS...)	ツールの集約 (Teams、新LMS)
教育開発支援	・手作りマニュアル ・頻繁なオンラインFD学習会 ・個別対応(特に非常勤教員)	教育開発支援 WEBサイトの構築(集約)

テクノロジーの発展・活用

7

京都橘大学教育開発・学習支援室WEBサイト(教育開発支援ページ)

ホーム	組織概要	教育開発支援	学習支援	調査・研究	お問い合わせ
※サイトの一部を学内限定公開にするためにパスワードロックしています。パスワードをお忘れの方は、 cesd@tachibana-u.ac.jp までご連絡ください。					
各種マニュアル		過去の学内FD関連動画			
ポータルサイトやTeamsなど京都橘大学で使えるLMSの使用法や使用上の留意点、動画教材の作成・配信方法などを解説しています。		過去、学内で開催された「全学FD学習会」や「たちばな教育サロン」等の動画やレジュメをご覧いただけます。ご覧いただくには、パスワードが必要です。わからない方は、 cesd@tachibana-u.ac.jp までお問い合わせください。			
授業づくり等参考リンク集		教材・ワークシート集			
授業づくりに役立つ外部リンク集です。少人数授業の導入で使えるアイスブレイク集や、新任教員からベテラン教員まで参考になるであろうFD動画(ハンドアウト付)集、全国のFD・SDイベント情報などを紹介しています。		自由に編集してご利用いただける教材やワークシートをダウンロードいただけます。アカデミックスキル教材、シャトルカード(大福帳)、チェックリストやルーブリックなどがあります。			
ニュースレター		学内イベント情報			
教育開発支援センター時代からのニュース					

1. 京都橘大学の事例 —遠隔授業による変化

①授業アンケートの結果の改善

- ・過去最高の平均点を2020年度、2021年度前期に連続更新
- ・遠隔で学生の反応がわからない
⇒**中間授業アンケートの導入**
⇒76.2%の教員が「結果を見て参考にした」と回答

②成績の向上？格差の拡大？

- ・【成績向上】出席率の上昇、課題を出す科目の増加、オンデマンド授業による復習のしやすさ等が要因か
- ・【格差拡大】オンラインが苦手／他者に助けを求められない／自主学習が苦手な学生と、そうでない学生とで格差が拡大

③教員の負担増？

- ・教材作成、学生とのやりとり、フィードバックの手厚さ
- ・1回つくればそれでOK？
(科目特性による／真面目な教員ほど改良する)

9

(参考) 全国大学教員調査結果

- ・遠隔授業における、**個々の学生の反応の把握・識別**
⇒大きな課題：57.1%、ある程度課題：36.6%
- ・遠隔授業による、**授業の達成目標の到達度**
⇒良くなった：17.0%、悪くなった：21.0%
- ・遠隔授業により、**授業に取り残される学生が生じていることが問題**
⇒肯定：75.8%
- ・遠隔授業により、**教員の時間的負担が大きくなることが問題**
⇒肯定：88.1%
- ・遠隔授業により、**教員による差が大きくなることが問題**
⇒肯定：93.6%

報告内容

1. 【教育】 京都橘大学の事例
2. 【教育】 他大学のICT活用教育事例
3. 【学習】 コロナ禍における学生の学び
4. 【学習】 全国におけるゼミナール教育の状況
5. まとめ

11

2. 他大学のICT活用事例 —事例紹介の背景

- 日本私立大学協会機関紙『教育学術新聞』企画「コロナ禍でのICT活用教育」
- 26事例を収集し、広く他者が参考にすることができ、コロナ禍収束後も高い可能性を持つ6事例についてオンラインインタビューを実施
⇒2022年3月の紙上で紹介予定
- 2事例を以下ご紹介

2. 他大学のICT活用事例

— 1) WEB教科書活用からVR教材開発まで

- 沖縄大学 国際コミュニケーション学科 中国語科目 渡邊ゆきこ教授の事例
- コロナ禍以前よりICTを活用した授業を展開
- **語学教育の特性**
 - 反復学習が重要⇒教員の体力（個別対応）の限界
- **【聴解】WEB教科書（e宿題／eテスト）の活用**
 - **既存の良い教材**との出会い
- **【発話】発話練習ソフトの開発と活用**
 - JavaScriptを学びつつ、**既存のシステムを活用**して開発
- **【会話】VRフィールドワークシステムの開発と活用**
 - 誰もが感覚的にVR空間を生成できる**ソーシャルVRプラットフォーム「Mozilla Hubs」を活用**して仮想空間を生成
 - 仮想空間上でフィールドリサーチ／会話練習

ICTのプロでなくとも、既存のシステムを有効活用すれば、可能性は広がる

13

2. 他大学のICT活用事例

— 2) 教育関係者間の連携強化

- 日本薬科大学 薬学科 実務実習の事例
- **実習は対面だが、関係者コミュニケーションが遠隔化**
 - 担当教員、担当職員、現場実務者、学内カウンセラー、学生
 - Teamsビデオ会議によるミーティング
 - TeamsのPlaner機能によるタスク管理
 - Share Point活用によるデータ共有
- **情報共有頻度の向上**（移動コストなし、短時間で可能）
- **情報密度の向上**（相手の顔が見える、画面共有）
- **検索性の向上**

グループウェアを使いこなすことで
いままでつながりにくかった人たちと繋がれる

報告内容

1. 【教育】 京都橘大学の事例
2. 【教育】 他大学のICT活用教育事例
3. 【学習】 コロナ禍における学生の学び
4. 【学習】 遠隔ゼミナール教育の状況
5. まとめ

15

3. コロナ禍における学生の学び —報告の背景

●大学教育学会課題研究「大学教育における質的研究の可能性」における調査

- ・ 8名の大学教育研究者によるプロジェクト
- ・ 「コロナ禍における大学生の学び」の様子を掘り上げることが目的。
- ・ 2020年10月～11月に**1学年5名×4学年＝20名の大学生にオンラインでインタビュー**を実施し、仮説を生成。
- ・ 2021年2月に仮説検証のための**インターネット調査を実施し、大学生1000名から回答**を得た。
- ・ 以下のデータ出典：
上島洋祐（2021）「「コロナ禍における学生の学び」に関する混合研究」大学教育学会課題研究「大学教育における質的研究の可能性」グループ編著『コロナ禍で学生はどう学んでいたのか』ジヤース教育新社，116-126.

2. コロナ禍における学生の学び

— 1) 学生の質問行動

	仮説	肯定	—	否定
1	メールでの質問だと先生にメールを送る、先生からの返信を待つなど時間と手間がかかるが、 対面での質問だとその場で話して解決できる点が良い と思う。	60%	30%	10%
2	メールでの質問は、文章だけ で質問する内容を先生に説明しなければいけないので 難しい と思う。	58%	27%	16%
3	大人数の対面授業では周りに人がいて質問しにくい、大人数オンライン授業では周りにみんながいる感覚がないので、 チャットなどで質問しやすい と思う。	50%	31%	19%
4	コロナ禍以前は研究室まで行くなど先生を探し回って質問していたが、オンライン授業になって チャットやメールで質問できるのが楽 になったと思う。	51%	31%	18%

メールやチャット等で質問ができる**利点を感じつつ**、メールやチャット等で質問することの**困難さも感じている**。

17

2. コロナ禍における学生の学び

— 2) 課題に対する意識

	仮説	肯定	—	否定
1	授業の振り返りとして課題に取り組むことで、 授業内容が頭に残るものは良い課題 だと思う。	57%	30%	13%
2	日常生活での新しい視点や気付きを与える課題 は、すごく面白くて興味を持てると思う。	52%	32%	16%
3	課題が「こんな簡単なやつでいいのかな」と感じてしまう場合は、 しっかりと勉強できているのか不安 になる。	52%	31%	18%
4	学生自身に考えさせる課題 は、自分と向き合うことができたので、課題として効果的であると思う。	49%	34%	17%
5	ある講義科目では、対面の時は授業中に課題に取り組む時間が10分程度設けられていたが、オンラインになって授業中に課題に取り組む時間がなくなった。そのため、 授業時間中に課題に取り組む時間を設けてほしい と思う。	45%	36%	19%

質の高い課題（記憶に残る、考えさせられる、新しい気づきがある課題）には肯定的だが、**時間との闘い**になることもある。

詳しいことは、
是非こちらをご覧ください。



大学教育学会 課題研究「大学教育における質的研究の可能性」グループ(著)

『コロナ禍で学生はどう学んでいたのか——質的研究によって明らかになった実態』

2021/10/15 ジアース教育新社

※筆者らに印税は入りません。

19

報告内容

1. 【教育】 京都橘大学の事例
2. 【教育】 他大学のICT活用教育事例
3. 【学習】 コロナ禍における学生の学び
4. 【学習】 遠隔ゼミナール教育の状況
5. まとめ

4. 遠隔ゼミナール教育の状況 ー 報告の背景

●ゼミナール教育（ゼミ）とは？

- ・人文・社会科学等の領域における学士課程教育としての専門ゼミ実施率は98.3%、そのうち83.3%は必修
- ⇒人文・社会科学等の領域では特に重要科目として位置づけ
- ・ゼミ＝「学生－教員間及び学生－学生間の緊密な対話によって知識・技能・態度を総合的に育成することを目指す少人数教育」
- ⇒対話を重視する教育方法

●コロナ禍におけるゼミナール教育

- 1) ゼミナール教育は遠隔化されたのか？
- 2) 遠隔ゼミナール教育を学生はどのように捉えたか？
- 3) 今後のゼミ形態をどうしてほしいか
- 4) 遠隔ゼミナールでコミュニケーションはどのように変化したか？

【方法1：インターネット調査】人文・社会科学領域等の3、4回生1450名が回答（2020年12月～2021年1月実施）

【方法2：インタビュー調査】人文・社会科学領域の5領域6名のゼミ教員と12名のゼミ所属学生が回答（2020年9月～10月）

※科学研究費助成事業・若手研究『人文・社会科学領域の学士課程教育における帰属組織モデルの実証的研究』（課題番号：18K13197_平成30年度～令和3年度）の一部

21

4. 遠隔ゼミナール教育の状況

ー 1) ゼミナール教育は遠隔化されたのか？

・ 2020年9月時点における後期の授業実施方針について、2020年度後期「**ゼミ等は対面**」と回答した大学は**62.3%**

文部科学省（2020）「大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査」
https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2021/5/8)

・ 実際2020年度後期に「**対面のみ**」だったのは**20%**（「遠隔のみ」38%／「対面と遠隔の併用」39%）

4. 遠隔ゼミナール教育の状況

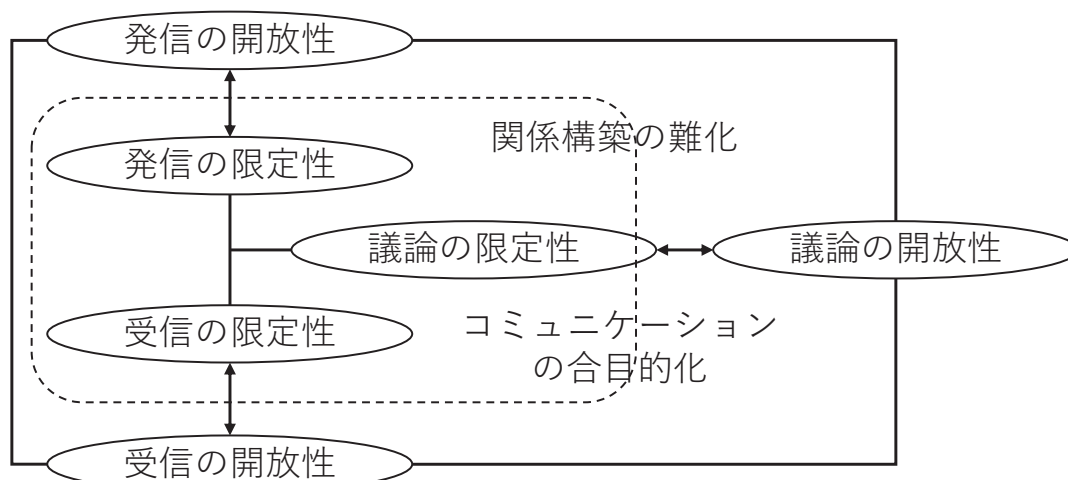
— 2) 遠隔ゼミを学生はどのように捉えたか？

	項目（遠隔化で、しやすくなったか）	全体(5件法)	
		肯定	否定
学習側面	授業への出席	53%	11%
	授業中のプレゼンテーション	36%	33%
	授業外でのゼミの内容に関する自主学習	31%	27%
	授業中の発言や質問	24%	42%
	授業中のグループワーク等学生同士のやりとり	15%	62%
共同体側面	教員とのコミュニケーション	18%	55%
	同学年間のコミュニケーション	13%	63%
	異学年間のコミュニケーション	7%	79%
学修成果	専門知識の理解	15%	36%
	専門知識の活用力の向上	14%	38%
	技能（スキル）の向上	17%	37%

23

4. 遠隔ゼミナール教育の状況

— 3) 遠隔化によるコミュニケーションへの影響



遠隔ゼミでは、**学生や教員の雰囲気**を察知できなくなり（**受信の限定性**）、**相手に合わせたコメント**をし難くなる（**発信の限定性**）。一方、**チャット等**を活用することで**全員が平等に発言**するようになったり、**授業外のやりとりが多くなり**（**発信の開放性**）、**対面では埋もれていた学生の様子**がわかるようになったり、**教員から受け取る情報が増える**（**受信の開放性**）。**授業中の議論はし難い**（**議論の限定性**）一方、**授業外での議論はしやすくなる**（**議論の開放性**）。しかし、総じて「**コミュニケーションの合目的化**」が起こり、目的から外れた対話の広がりが見られ、学生間や教員—学生間での「**関係構築が難化**」したことが明らかになった。

4. 遠隔ゼミナール教育の状況

— 4) 今後のゼミ形態をどうしてほしいか？

形態	希望割合	主な希望理由
対面と遠隔の併用（対面の授業回と、遠隔の授業回がある形）	39.4%	・ コロナが心配 ・ コミュニケーションがとりやすい ・ 良いところどりしたい
対面のみ	23.5%	・ コミュニケーションがとりやすい ・ 理解しやすい ・ 集中して学べる
対面と遠隔の併用（対面と遠隔が同時に行われ、学生が好きな方を選べる形）	22.9%	・ コロナが心配 ・ 通学コストが下げられる ・ 個人の都合が尊重される
遠隔のみ	14.2%	・ コロナが心配 ・ 通学コストが下がる ・ 学修がしやすい

対面はコミュニケーションが取りやすく、**遠隔**は通学コストを下げる
学習のしやすさは学生によって認識が異なる

25

詳しいことは、
是非こちらをご覧ください。

西野毅朗(2022/02/10)『日本のゼミナール教育——人文・社会科学領域等の学士課程教育における学習共同体の姿』玉川大学出版部。



【主な目次】

序章 なぜゼミナール教育に注目するのか

第1部 ゼミナール教育の発展過程—歴史的アプローチ

第1章 戦前期のゼミナール教育

第2章 戦後期のゼミナール教育

第2部 ゼミナール教育の現状と課題—量的アプローチ

第3章 教員視点で捉えるゼミナール教育

第4章 学生視点で捉えるゼミナール教育

第3部 ゼミナール教育のエスノグラフィー—質的アプローチ

第5章 エスノグラフィーの方法論と対象

第6章 専門ゼミナールへの導入過程—2 年次演習

第7章 困難な課題への挑戦—3 年次演習①

第8章 関係性の変化と影響—3 年次演習②

第9章 就職活動と卒業研究と社会人生活—4 年次演習

補章 遠隔ゼミナール教育の姿
終章 ゼミナール教育の過去・現在・未来
資料編

今回の報告部分

報告内容

1. 【教育】 京都橘大学の事例
2. 【教育】 他大学のICT活用教育事例
3. 【学習】 コロナ禍における学生の学び
4. 【学習】 遠隔ゼミナール教育の状況

5. まとめ

27

遠隔授業で教育・学習の場はいかに変化したか

- 基本的には、コミュニケーションが取りにくくなっている
 - このことに自覚的になり、補完する工夫が必要
- 工夫（ICT活用）次第でコミュニケーションが取りやすくなった（できる）部分もある
 - 文字によるコミュニケーション
 - 授業時間外のやりとり（課題／メール／チャット）
 - 大学に来れない学生とのやりとり
 - 学生以外の教育関係者とのやりとり
- 遠隔授業では学生の自主学習力が問われる
 - 困ったときに対処できるか（相談できる相手がいるか）
 - 遠隔授業を上手に活用して学べるか
- 学修成果を高めるために、どう遠隔授業の経験を活用できるかが今後の課題
 - ハイフレックス授業、ハイブリッド授業、反転授業の可能性
 - 時間外学習（課題、コミュニケーション）の促進
 - VR活用など、最先端技術活用の可能性

ご清聴ありがとうございました。

ご意見・ご質問がございましたら
Q&Aへお書込みいただくか
この後の交流会でお声がけいただくか
下記メールアドレスにご連絡いただければ幸いです。
nishino-ta@tachibana-u.ac.jp

29

質疑応答

授業アンケートについて

＜2021年度前期 中間＞

実施期間 2021/06/01～/06/07

回答率 60.9%

＜2021年度前期 期末＞

実施期間 2021/07/09 ～08/07

回答率 50.4%

31

中間授業アンケート項目

設問1 この授業を受けるために主に使っているツールを選択してください

設問2 この授業を主にどこで受講しているか教えてください。

設問3 この授業の受講時間帯を記入してください(複数選択可)。

設問4 この科目内容のこれまでの理解度を自己評価し、1つ選択してください。

設問5 この授業の受講態度を自己評価し、1つ選択してください。

設問6 この授業の1回あたりの課題にかけているおおよその時間を1つ選択してください。

設問7 この授業で出された課題に対してのフィードバックの状況について、1つ選択してください。

設問8 この授業を受けてのこれまでの感想、受講にあたって困っていること、科目担当教員へのメッセージ、質問、希望、改善してほしい点等あれば、自由に書いてください。

期末授業アンケート結果の推移

授業アンケート項目\年度（前期）全科目平均点（5点満点）	2019	2020	2021
私は、この授業の内容をよく理解できた。	4.17	4.18	4.26
私は、この授業の内容に興味・関心が持てた。	4.20	4.25	4.30
私は、この授業をまじめに、意欲を持って受講した。	4.30	4.39	4.44
教員は、シラバスに沿って計画どおり授業を行った。	4.34	4.35	4.48
教員は、十分な準備を行い授業を進めた。	4.35	4.41	4.50
教員は、理解を促したり考えさせたりするための工夫を行った。	4.32	4.33	4.42
教員は、授業外での学修方法(資料・課題など)を明確に示した。	4.20	4.30	4.36
総合的に見て、この授業を受講してよかった。	4.26	4.32	4.41

学習力を高める取り組みについて

【直接的取組】リフレクション・デイの導入

- ・ 半期に1回90分～100分
- ・ 自身の成績や学習（学生）生活を振り返り、目標設定をする。
- ・ 履修ガイダンスも含む

【間接的取組】新学部・初年次必修教養科目「クリティカルシンキング」の開講

- ・ 目的目標を達成するための最適解を導き出す思考法
- ・ 自身の身近な問題解決および経験学習に取り組む⇒高校生活から大学生活への円滑な移行を促す初年次教育としての機能も果たす。
- ・ 学生が解決に取り組んだ問題例：「朝起きられない」「課題を期限内に提出できない」「グループワークが苦手」「英語力を高めたい」「アルバイト問題」etc...

2021年度第27回FDフォーラム

大学教育の「場」を問い直す

-ポストコロナに向けて-

シンポジウム1

地域とともに創る「学びの場」
-新潟大学ダブルホーム制度について-

新潟大学 農学部
准教授 大橋 慎太郎



2022年2月19日

自己紹介

氏名： 大橋 慎太郎

所属： 新潟大学 農学部

経歴： 新潟大学大学院自然科学研究科博士後期課程 修了 博士（農学）

専門： 農業環境工学，農業施設，農業機械，
農業情報などの関連分野を専門とする

「儲かる農業」を目指し、農業生産における地域資源の利活用による地域活性化に関する研究活動を行う

新潟大学 教育・学生支援機構 教育プログラム支援センター
連携教育支援オフィス ダブルホーム部門 副部門長

COVID-19の影響を受けた授業形態

オフキャンパスでの活動：ダブルホーム

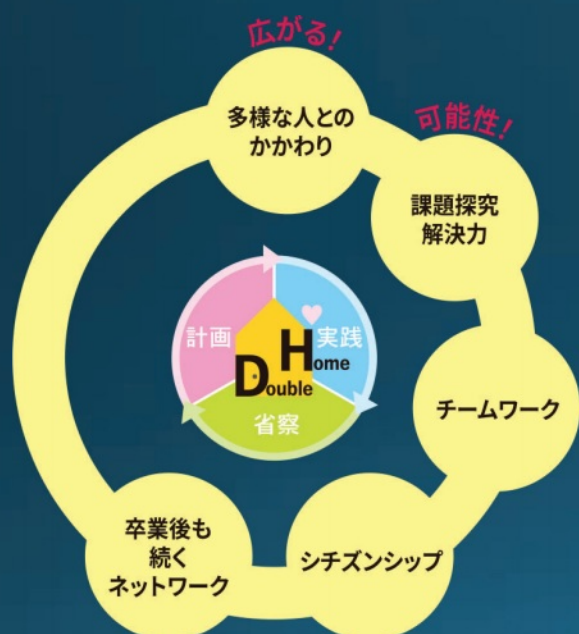
2007年度文部科学省学生支援GP

「ダブルホーム制によるいきいき学生支援」事業で開始

学生たちの社会で活躍するために必要な力、
特に「人と関わる力」を教職協働で育む

2011年度以降、新潟大学独自の取り組みとして継続

新潟大学ダブルホームとは



ダブルホームは、地域や仲間の思いを大切にしながら、
正解のない地域課題に

学生・教員・職員によるチームで取り組むプログラム

第1のホーム：学部・学科という専門の学び場

第2のホーム：地域に密着した「新たなふるさとづくり」
としての地域活動

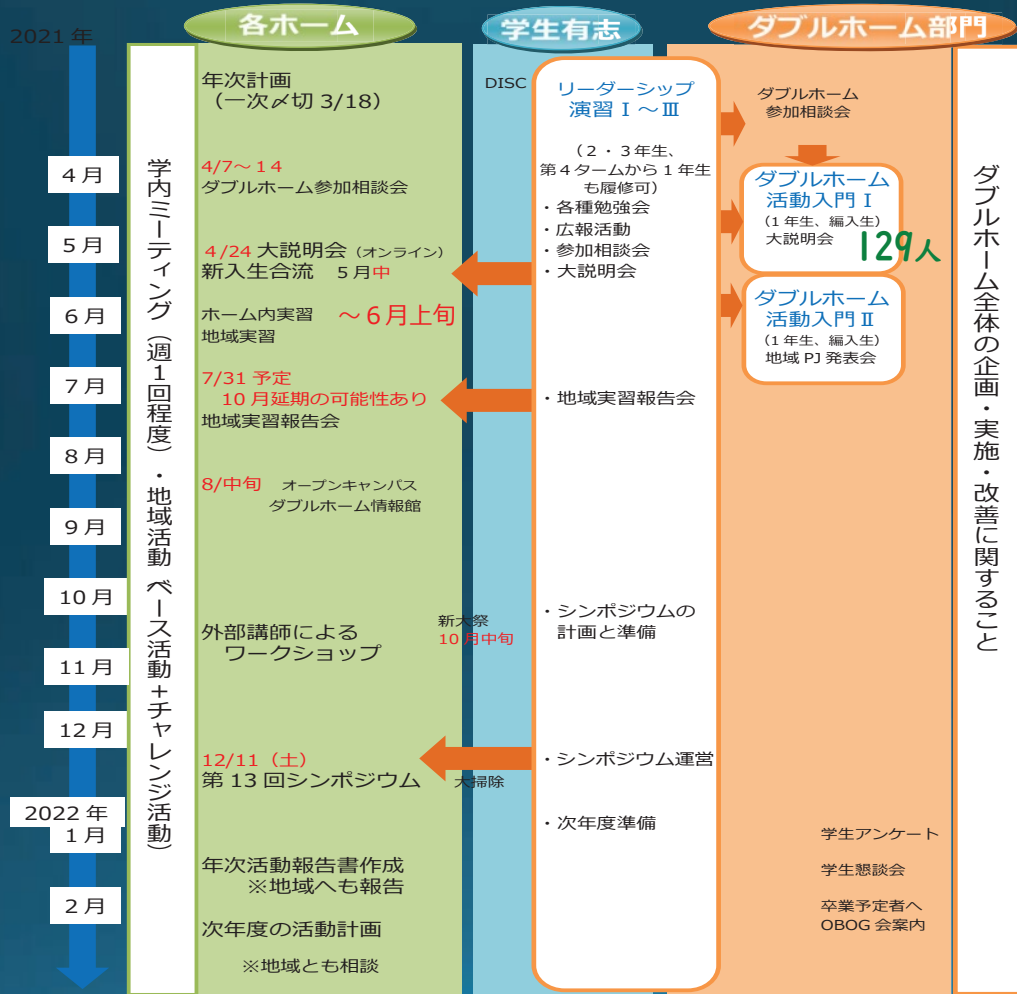
地域の思いと向き合う中で「自分たちに何ができるか」
活動を計画・実践・省察することで、これからの社会生活
に必要なシチズンシップやチームワーク力を育む

学生たちの「地域のために何かしたい」「多様な人々と交
流したい」「成長したい」といった思いから生まれる主体
的な取り組みを可能とする場



新潟大学ダブルホーム

年間計画と実施体制



ダブルホーム 活動地域マップ

今年度は18ホームで
新潟県と山形県で活動



各ホームの紹介 ※2021年4月時点での情報です。

A Blange

うちのつながりプロジェクト

(新潟市西区内野・大学南)



活動拠点がキャンパスに近く地域交流が盛んです。地域の魅力発信や町の活性化を目標に活動しています。

- 防災訓練●街歩き●内野まつり
- 餅つき大会●新大ランド
- 大学南ヶ丘祭り 等



参加者の声

B いろはの風

松野尾との絆をつなぐwithコロナ

(新潟市西蒲区松野尾)



松野尾コミュニティ協議会と連携しながら子どもたちや地域に向けた活動を展開しています。

- 街歩き●七夕会●学習会
- クリスマス会●お月見会
- 知と技と運の競技会 等

参加者の声

D さんせっと

歴史とヒメサユリから板山の魅力を発信する

(新潟市板山地区)



地域の行事などへの参加を通して板山の魅力である自然や伝統を再認識し、地域を盛り上げます。

- 田植え●夢まつり●顔合わせ会
- キッズキャンプ●収穫祭
- ほやほや 等



参加者の声

E アース・アース

燃えよ赤塚魂、輝け佐潟愛

(新潟市西区赤塚佐潟)



ラムサール条約に登録されている自然豊かな佐潟で社会人団体と連携しながら佐潟の自然を守る活動をしています。

- 新入生初訪問●灯籠づくり
- 佐潟祭り●白鳥観察
- こい祭り 等



参加者の声

F Natural

「玉川の」「Fホームの」一員となる!

(山形県小国町玉川地区)



地域愛にあふれ、私たちを温かく迎えてくれる玉川で田植えや雪堀の手伝いをしたりスポーツで交流を図っています。

- 田植え●地域散策
- グランドゴルフ●秋祭り
- しめ縄づくり●雪堀 等

参加者の声

G 暖

豊実・日出谷とより密接な関係性の構築

(阿賀町日出谷・豊実地区)



地域の方々との交流を深め、お互いのことをよく知り合うことを目標とし、わげしよの会の皆さんと地域行事を行っています。

- 打合せ会●新入生顔合わせ会
- キャンドル作り●産業祭り
- キャンドルナイト 等



参加者の声

H ほたる

Uchi knowing ～内野ともっと交流を～

(新潟市西区内野町)



新潟大学と内野町を繋げて、その輪を広げることを目標としています。小学生や地域の方と地域を盛り上げます。

- 灯籠ワークショップ●内野散策
- 新川ほたる●新大ランド 等

参加者の声

I あい

板尾にZOOM あい

(長岡市板尾地域)



伝統と文化を大切にしている板尾で祭りに参加したり、伝統文化を学ぶことで地域との交流を深めています。

- 地域散策●とちお祭り
- 酒蔵見学●手まりづくり
- 保育園訪問 等



参加者の声

J なごみ

地域との対話～一歩前進～

(山形県小国町檜口地区)



参加者の声

わらび園のお手伝いを中心に活動しています。地域を盛り上げるため、学生らしいアイデアを地域に提案し実践しています。

- 山焼き●わらび園開園
- わらび会●わらび園開園
- 新大森店●雪囲い 等



K かもろに

加茂ってすごいかも!プロジェクト

(加茂市)



参加者の声

「学生」「地域」「外部」の三者が、お互いに加茂の魅力(=すごい!)を共有し加茂を活性化することを目指して活動しています。

- 雪橋まつり●街歩き●AKARIBA
- 秋祭り(ハロウィンイベント)
- 加茂子育てフェスタ 等

L 輪～つながる～

地域とつくる大きな輪 ～坂井輪で繋がるLホームに～

(新潟市西区坂井輪中学校区)



参加者の声

地域の方のあたたかさ、教職員のサポートなど「輪」を感じられるホームです。地域との親睦を深めイベントを実践しています。

- 顔合わせ●地域散策●子ども食堂
- 坂井輪祭り●郷土料理教室
- 振り返り会 等



N ねすと

万代からはじまる・つなげるプロジェクト

(新潟市中央区)



参加者の声

新潟の中でも一大商業地区の代表である「万代シティ」や、ミズベリングが開催されている「やすらぎ堤」などが活動のフィールドです。中心市街地ならではの地域課題の発見・解決を考えていきます。またNST(新潟総合テレビ)と連携したホームの特色を活かし、他ホームの情報発信にも取り組みます。

- 川まつり●NSTまつり●ミズベリング
- 万代アースフェスタ

Q SunQ

わせだSunQ ～早稲田に感謝を伝えよう～

(村上市早稲田地区)



参加者の声

早稲田の伝統や歴史を知り、親睦を深めています。情報発信や人的交流の活性化を目指して活動しています。

- お花見会●三吉様参拝
- クイズラリー●しめ縄づくり
- 敬老会●収穫祭●反省会 等



R あっとほーむ

そば作りを通じた地域との交流と絆

(阿賀町上川地区)



参加者の声

そばが有名な七名でそば作りを中心に1年間活動します。七福の里祭りなどのお祭りにも参加し、地域の方々との交流を深めています。

- 地域散策●七福の里祭り
- そば種まき～収穫
- 上川そば祭り●そば交流会 等



S しいたけ

Oh!待ちきれない!中ノ沢と元気になるSホーム!

(阿賀町中ノ沢地区)



参加者の声

豊かな自然と人々の温かさが素晴らしい中ノ沢でイベント企画や地域行事の手伝いを通じて地域の方と交流をしています。

- 観桜会●NST森づくり運動
- 初訪問●かや刈り
- さいの神 等

T ほりごたつ

十日町×しちべえ×美人林=ほりごたつ

(十日町市松之山下川手集落)



参加者の声

「生き物との共生」を目標に、無農薬無肥料、手作業でお米作りを行っています。地域の方との交流を通して楽しさや苦労を学んでいます。

- 苗づくり～苗取り～稲刈り
- 道言節(春・秋)●収穫祭
- 手売り 等

Tホーム ほりごたつ

- 活動地域：

新潟県十日町市松之山下川手地区



- 活動内容：

無肥料無農薬による米作りを地域の伝統農法とともに学び、「自然との共生」「生物多様性」について考える。

様々な年代の人々との交流に加え、昔ながらの苗代作りから始まり田植え，除草，稲刈，乾燥，精米、パッケージング、販売までを通して食べ物を作ることの大変さや大切さを学ぶ。

11

伝統農法による米作り



しちべえ 二湿地米



通常の米作り

中干：

水田の水を抜き、
土にひびが入るまで
乾かす

効果：

- 根の活力向上
- 窒素の吸収抑制
- 酸素の供給
- 収穫の作業性向上¹³

しちべえ 二湿地米

ほりごたつの米作り



自然との共生 “江”とビオトープ



15

地域イベント（道普請）



62

集落との交流



※コロナ蔓延前の活動写真³⁷

ダブルホーム活動で 期待する学生の成長

- 発想力 創造力 着想力
- コミュニケーション能力（雑談力）
- 多角的に考える力，俯瞰力
- 対応力（失敗対策）

発想力 創造力 着想力

- 発想力：固定観念にとらわれず、新しいアイデアを生み出す力
- 創造力：独自の方法で新しい何かを創り出す力
- 着想力：何かと何かを組み合わせで新しい何かを生み出す力

自身の持つ知識を応用し、課題解決に挑む
知識×経験⇒知恵

知識・技術が実際に利用・応用されている現場を

地域
活動

地域活動での知恵との出逢い



伝統農法体験



地域活動での体験と感・動



当たり前は
当たり前ではない
と気づく経験

コミュニケーション力（雑談力）

- 目配り：周囲をよく観察し、細かなことに気づくことができる
- 気配り：少し先を考え、先回りして行動できる
- 心配り：相手の立場になって行動できる

自身による気づき，感じることで身につくもの

社会（先輩，**大人**）との会話・交流・活動
どうして地域の方々は「よくして」くれるのか

地域
活動

多角的に考える力，俯瞰力

- 論理立てて物事を考える力（ロジカルシンキング）
- 物事の妥当性を含めて考える力（クリティカルシンキング）

ダイバーシティ(学部、年代、スタンス)：他者との交流

社会（先輩，大人）との交流・話し合い・意見交換

地域
活動

対応力（失敗対策）

- 想定外への対応力，臨機応変な対応力
- リカバリー

実際に失敗すること，失敗談から学ぶ

信頼関係を築くことで，失敗談を聞く機会を得る

地域
活動

地域活動での社会との交流

地域の方への
インタビュー



地域のイベント
「道普請」への参加



コロナ禍での活動制限

- ・ 屋外での活動や運動時には、マスクを外してよい。
ただし、2メートル以上を保ち、（飛沫感染防止のため）**会話は控える**。

→コミュニケーション **×**

- ・ **不特定多数の人に対応**する活動は認めない。

→地域イベントへの参加 **×**

- ・ 活動時の**調理・飲食**（水分補給は除く）は、**原則禁止**とする。

→コミュニケーションツール **×**

コロナ過での具体的な活動

- ビデオ会議システムによるイベントへの参加
 - 学生企画の地域交流イベント
 - 大学主催イベント

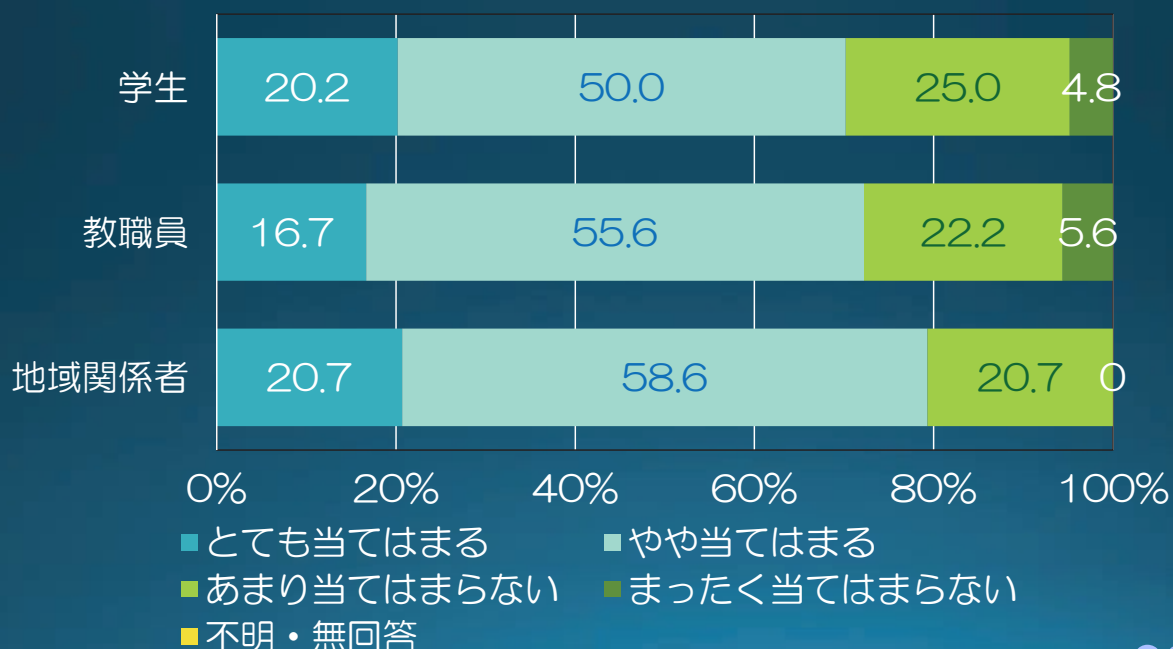
ダブルホームシンポジウム

- 地域行事

さいのかみ

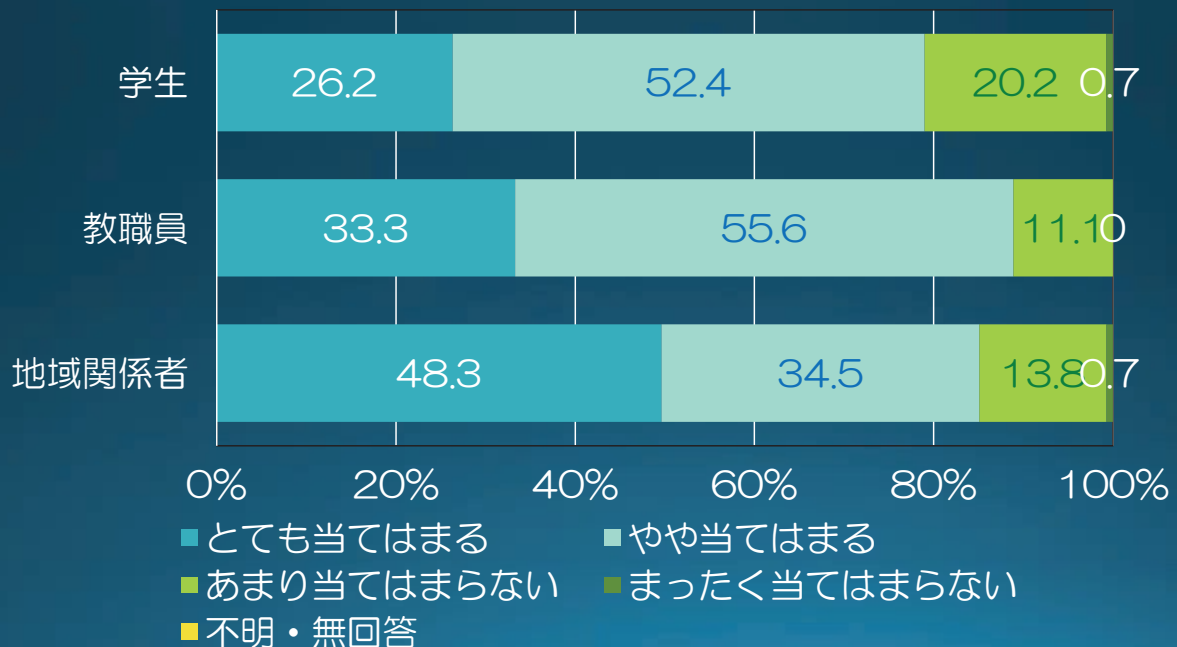
シンポジウムでのアンケート

問：現在のダブルホーム活動に満足している



シンポジウムでのアンケート

問：地域の方と学生たちは信頼関係を築けている



活動制限による影響と ポストコロナにおける課題

- 信頼関係構築の鈍化
新しい交流手段に対する温度差
- 帰属意識の低下
ホームメンバーとしての自覚
- 当事者意識の低下
主体的な行動や責任感



ご清聴ありがとうございました